
幻想郷から来た時鳥

ぎゅりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷から来た時鳥

【Zコード】

Z9197T

【作者名】

さやりこ

【あらすじ】

何度も転生を繰り返してきたしでの鳥、ときどりてんせい時取纏静は幻想郷の新しい住人を探し続ける。今回の生で尋ねたのは麻帆良。彼はここでどんな出会いを果たすのか？

プロローグ

しでの鳥。ホトトギスの怪異。その特徴は三つ。

一つ、死なないこと。不死性を越える不滅性。その命が終わることはない。

一つ、托卵。普通のホトトギスが多種の鳥の巣に自分の卵を産み育てさせるのに対してもこの鳥は人の胎内に自らを宿し育てさせる。そうやって自らを繋ぎ続ける。

一つ、擬態。人と同じように生き、人と同じように暮らし、人と同じように喰い、人と同じように喋り、人と同じように死ぬ。

はるか昔からいくつもの時代を生き続けてきた彼はどのように生き、何を想い、どのように死ぬのか？

第一話～自己紹介～

「今日からこのクラスの副担任になります。時取纏静ときとりてんせいといいます。
これからよろしくお願ひします」

それにして、このクラスはすごいな。なんていうか個性的な人たち
がたくさんいるし。まあ、担任が一番個性的だが…。

「では、一時間は時取先生へ質問する時間にしましょ～」

隣に立っている担任、ネギ先生（10歳）がそう言つと一人の女生
徒がメモ帳片手に前に出てきた

「はいは～い。質問は私にお任せあれ。はじめまして時取先生。私は朝倉和美。先生のこと根掘り葉掘り聞き出しちゃうよ～」
「ど～ぞその鳥と同じ匂いがするな。

「お手柔らかにお願いしますね」

「ではまず簡単なプロフィールを」

「名前は時取纏静。歳は25。身長は176センチ。体重は62キ
ロ。いかでいいですか？」

「オーケーです。次は趣味と特技を」

「趣味は怪異の蒐集。特技は小物作りですかね」

「ふむ、怪異とはなんですか？」

「簡単に言えば、妖怪とか不可思議な現象とかですね。鬼とか神隠しどかそういうものを調べるのが趣味です」

「なかなか個性的な趣味ですね。では次は皆さんお待ちかね。うちのクラスで気になる人は！？」

朝倉がそういつた瞬間クラスのほとんどの人の目つきが変わった。いわゆる捕食者の目つきだ。

「そ～ですね～。桜咲刹那さんですかね」

そう答えると「おおっ」という声にほとんどの人が桜咲を見る。桜咲は目を丸くして驚いている。やつぱり覚えてないか。

「なぜ桜咲さんを選んだんですか？」

「彼女は覚えてないようですが昔一度会ったことがあるんですよ

「なるほどなるほど。それじゃあ次は…」

かなり多くの質問をされたんだが意外に早く終わつたな。時間もまだあるし。

「早く終わっちゃいましたね。それなら時取先生の話でも聞きましたか？」

隣にいるネギ君が話しかけてくる。それにしても俺の話か。話せることと言つたらやつぱり怪異のことしかないな。

「じゃあ、詳しく知りたい怪異がある人は手を上げてください。出来る限り答えましょう」

そう言つとちらほら手を上げる人がいる。ネギ君に名簿を借りて名前を呼ぶ。

「じゃあ、マクダウヒルさん

「吸血鬼について」

名前を呼ぶと短くそう返してきた。

「吸血鬼ですね。吸血鬼は文字通り吸血を行つ怪異です。吸血鬼の吸血には二種類あります。一つは食事を目的にしたもの。もう一つは眷族作りを目的としたもの。食事の場合はそのまま肉体も食べてしまします。ほおつておくと眷族になつてしましますからね。また吸血鬼は高い再生力と身体能力を持つています。マンガなどでよくあるように自らの体を蝙蝠に変えるなど変身能力も持つています。これだけ聞くとものすごく強ですが弱点も多くあります。日光や銀の十字架、二ン二ク、聖水。他にも呼吸器系、内臓器官を攻めることや毒も有効であると言われています。まあ、普通の人間には難しいですが。ここまでで何か質問はありますか?」

そう言うと一人手を上げた。名簿で名前を確認して呼ぶ。

「長谷川さん」

「眷族になつてしまつた人が元に戻る方法はあるんですか？」

「次で言うつもりだつたんですが先に言われちゃいましたね。方法ですが一つだけあります。本来主人に従うべき従僕が、逆に主人に害をなした時、その主従関係は崩壊し、従僕は従僕足る資格を剥奪されると言われています。つまり、自分を吸血鬼にした相手を倒せば元に戻れるんです。倒せるかどうかは別ですが……。またマンガなどによくいるヴァンパイアハンターですが主に三種類に分けられます。一つ目は吸血鬼。いわゆる同族殺しですね。彼らは吸血鬼の能力を使い吸血鬼と戦います。二つ目はハーフヴァンパイア。ダンピールとも言いますね。彼らはハーフゆえに吸血鬼の弱点はあります。その代わり能力も半分です。彼らは吸血鬼の能力と共に銀の十字架や聖水など吸血鬼の弱点になる武器を使つたりして戦います。三つ目はいわゆる専門家。日本で言う陰陽師ですかね。有名なものでエクソシストですね。彼らは主に先ほど言つた吸血鬼の弱点を使って戦います」

周りを見て他に質問がないことを確認してからマクダウェルさんに聞く。

「これくらいでいいですか? マクダウェルさん

「ああ、充分だ」

そう彼女が答えると丁度鐘が鳴り授業を終了した。

放課後歓迎会をしてもらつたが好きかつて騒いだ挙句ほとんどの奴が片づけをせずに帰つた。

「『』めんな~時取先生。片付けさせてもうひで

「あいつら好き勝手騒いでいて片づけしないんだから」

「かまいませんよ。近衛さんに神楽坂さん。この程度ならまだ可愛いものです。僕の知り合いなんか好き勝手騒いで酔つてない人を片つ端から酔い潰していくんですから」

たとえば鬼とか鬼とか鬼とか…。

「あははは…」

「それはきついわね」

それでこれで終わりだな。

「じゃあ一人ともまっすぐ帰って明日遅刻しなこう」

「「はーー」」

さて俺もさっさと帰るか…。

桜通りの見事な桜を見ながら帰る。ふと、顔を上げると見事な満月があつた。

「綺麗な月だな…」

「そうだんなこんな日には血が飲みたくないな

振り返るとマクダウエルが黒いことながら帽子とマントをついた姿で立っていた。

第一話～吸血鬼としのぎの鳥～

「「んばんは、マクダウエルさん」

後ろに立っていたマクダウエルに話しかける。

「「んばんは、時取先生」

「「悪いけど少しだけその血を分けてもいいよ」」

マクダウエルの言葉と自分の言葉が重なる。

「...?」

顔には出でなこよつこじているがかなり驚いたようだ。

「へへへ」

「「なぜ私の血」」とがわかった?」

また一つの声が重なる。

「ちっ、来い茶々丸」

「yes, master」

マクダウエルの呼びかけに何処からともなく絡繆が出てきた。

「「んばんは、絡繆さん」

「」さばんは、時取先生」
れでこれからどうなることか。ひ

私の目の前には今日赴任してきた時取纏静がいる。こいつは強い。
敵意がないから計画の邪魔にはならないだろうがほつといて肝心な
ところで邪魔をされると困るからな。しかしどうしても私の考えが…。

「「先生にはいくつか聞きたいことが…」」

…よし糸であいつの口を縫い付けよう。

「怖いのでやめてください」

読心術でも使つていいのか?

「質問に答えるのはかまいませんがこちらも聞きたい」とがあるの
ですが」

「私の質問に答えてからだ」

まずは正体を聞くか…。

「僕はホトトギスの怪異ですか」

ほんとにイライラさせる。

「人の考えを読むのはやめろ」

「わかりました。それでは次の質問は？」

「何しに麻帆良に来た？」

「怪異の蒐集のためです。いつこう土地には怪異が現れやすいですから」

怪異ね。魔法使いのように正義に固執しているようではないな。こちら側に引き込めるか？

「先生。ちょっと私に協力してくれないか？」

俺は今マクダウェルの家に招待された。何でも協力してほしいことがあるとか。

「で、協力してほしいことは？」

絡繆が入れてくれた紅茶を一口飲んでから聞く。うまい。

「私に掛けられた呪いを解くのに協力してほしい」

「呪いねえ…」

「ああ」

紅茶をまた一口飲み考える。

呪いなら何度か解いたことはあるけど、いつものやり方で解けるだろ？

「それなら解けると思います…」

「なんだと！？ 本當か！？」

「準備に時間が掛かると思うけど解けると思いますよ」

「サウザンドマスターが力任せに掛けた呪いだぞ！？」

「僕のやり方は魔力とか関係ありませんから」

「それははどういうことだ？」

「真名。侵入者はどーじだ」

「前方600メートルの所。ん、なんだ？」

「どうした？」

「侵入者が召喚した鬼が侵入者を捕まえてこちりに向かって来る

「はあ？」

意味がわからない。制御できずに鬼が暴れることはあるかもしけ

ないが術者を捕まえるだと。どうしてひいて来るか?

「見る限り敵意はないが、だ談笑しながらひいて来る」

「…！」の場合ひければいいんだ？」

「どうあえず、話しあってもすればいいんだじゃないか？」

「やつらは話してこぬうから鬼が私たちの前にやつて来た。

「嬢ちゃん達、ちょっと聞きたい」とあるんやけど

「何の用だ！」

剣を構えながら聞く。

「ああ、儂らは戦つに来たわけやないのや。ほら召喚者も渡すから
の」

そう言って縄で縛つた召喚者をひいて渡してくれる。

「じゃあ、何しに来たんだい？」

「人を探し取るんや。時取…今は…「纏静です。オヤジン」 そりや
そりや時取纏静つて男がここにいるはずなんやけどな。嬢ちゃんた
ち知りんか？」

時取先生？

やり方はそのままのうち話すか…。期待しないで待つといつよ。

「マスター」

「どうした茶々丸」

「学園長からお電話です。」

「ジジイから?」こんな時間に何の用だ。

「ジジイ、なんか用か?」

「ヒガーンジヒロンかの? 今から世界樹前の広場に来て欲しいのじ
やが」

「なぜだ?」

「君のクラスの副担任についての話があるんじ」

「先生なら今私の家にいるが」

「むつ? なら彼も連れて来てくれ

「いいだら私も一度話したいことができたといふだ

「なるべく早く来てくれ

ガチャ。

くくく、面白ことになつそつだ。

「「こんな夜中」」じつはしたんですかみなさん？花見でもするんですか？」

マクダウェルに連れられ広場に向かった。何でも学園長が俺と話したいらしい。俺のことばれたかな？

広場に着くと学園長の他にも結構な数の先生と生徒もいた。

「フォツフォツフォ。それはまた今度にするかの。今日は君に聞きたいことがあるんじや」

「なんですか？」

「君は鬼という存在についてじつ思つかの？」

「鬼って漠然と言われてもな。俺の知っている鬼は、嘘が吐けない酒が好きな氣のいい奴たちですけどそれが何か？」

そう言つと周りの人達が少しばかりざわついた。

「口調が変わったの？」

「プライベートな話みたいだからな」

「実はその鬼から言伝を預かっておるんじや」

「やうか。あいつらはなんと？」

「郷に一人住まわせたいものがいる、と言つておつたそうじや」

郷にか、後で式を送らないとな。

「話はそれだけですか？なら寮に戻りたいんですねが？」

「待ちたまえ」

「彼は確か…。」

「なんだ？ ガンドルフィー一先生」

「君は何者なんだ。鬼のような化け物どもとなぜ交流があるんだ？」

「化け物…ね。」

「少なくとも卑怯な手段で彼らを追い出した人間よりは好感が持てますよ」

「なんだと」

「それに僕も妖怪です」

そう答えると周りの先生生徒たちが騒ぎ出した。が。

「静まれいっ！…！」

学園長の一喝で静かになった。

「…妖怪となるとお主はなんなのかのう？」

「俺はしでの鳥。まるか昔からいくつもの時代を渡り生きてきたホトトギスですよ」

時取は時鳥。纏静は転生。つまり転生を繰り返すホトトギス。時取、纏静はしでの鳥になるべくして生まれた男。

「お主の目的はなんじゃ？」

「人と妖怪の共存」

「なら麻帆良の者たちと敵対するつもりはないんじゃな？」

「友が傷つけられない限りは」

静寂が辺りを包む。

「……………」
「……………うむ、あいわかった。話はこれまで
終わりじゃ

「それでは」

踵を返し寮へと向かつ。

「それでは開き、「ちよつと待てジジイ」なんじゃヒヴァンジヒリン

「奴に呪いを解いてもらひ」と云つた

私がそつと魔法使いどもが騒ぎ出した。ジジイだけは騒がず返してきた。

「解けるのかの？」

「奴が言ひはな

「そりか、うむわかった」

れど、騒いでる魔法使いどもは無視して帰るか。くくつ、正義の魔法使いがどう動くか見ものだな。

第三話～魔法使いとの敵対、生徒との和解～（前書き）

感想ありがとうございました。

第一話のハーフヴァンパイアの所をほんのすこし書き加えました。

第三話～魔法使いとの敵対、生徒との和解～

学園長たちと話した次の日の夜。魔法使い達に囲まれた。

「何の用だ？」

先頭に立つているガンドルフィーーに訊ねる。

「君をこの学園から排除する」

「それは学園長の命令か？」

「いや、私たちの総意だ」

「やつか」

確認を取りながら周りを確認する。あれは桜咲と龍宮か。龍宮は桜咲に頼まれて仕方なく来ているようだな。

「（このやつ）」

夕凪を強く握りしでの鳥と名乗った私たちの副担任を見る。すると

「面白ことになつてゐじゃないか」

いつの間にか来たエヴァンジエリンさんが話しかけてきた。

「いいのかい？あのままじゃ呪いを解けなくなるかもしねないよ？」

龍富がエヴァンジョンさんに話しかける。

「かまうものか。あいつが本当にしでの鳥なら誰もあいつは殺せないよ。むしろ、あの余裕ぶつた顔が歪むなら見てみたいものだ」

エヴァンジョンさんはしでの鳥のことを知っているのか？

「その言葉からするとしでの鳥について知っているみたいだね。よければ教えてくれないかい。昨日調べたんだが全く分からなくてねすぐれている」

「そんなにすげーのかい？」

「すげいとこじりよくわからん」

どうこじりじだ？

「しでの鳥は人に擬態し、人の胎内に托卵する。そして自信を繋いでいく。人のように生まれ、人のように生き、人のように死ぬ。だが、寿命以外では死なない。よっぽどのことがない限り自身が妖怪だと気付かない。ほんとよくわからんよ」

人間を襲うでもなくただ生きるだけの妖怪。

「まつ。俺自身よくわかつてないからな」

「 「 ？」 」

「 いつの間に！？ 周りの人達もなぜ気付かない？ 」

「 周りの奴らは簡単な幻術にかかつてもらつてゐる 」

「 各個撃破と/or>うわけか 」

龍富が銃を抜きながらつぶやく。私も夕凪をすぐ抜けの構える。

「 いやいや随分と物騒だな。せっかく話しあって来てるのに 」

「 信じられるかっ！ 」

「 わたしは信じじよ。まつたく世は可愛かったのになあ 」

私がかわつー？

「 うふうふー私はあなたなど知らないー 」

「 いやいや、お前を近衛家に連れてつたのは俺だぞ？ 」

「 へつ？ 」

確かに里を出た時誰かに拾われたが…。

「 うわつ。本気で忘れてる 」

「 刹那… 」

「つるさいー！しっかりと顔を見る前にどうかに行つてしまつたんだ。その人の言葉以外覚えてない！」

確か…。

「「幻想郷は全てを受け入れる。もしさまた一人になつたらいつでも連れて行つてやる」だつけ？」

「…！」

構えを解く。

「刹那？」

「本当にあなたが？」

「まあ、そうだな」

頭を下げる。

「おい、どうし婕「ありがとうございました」…」

ずっとと言えなかつた言葉。この人のおかげで私はこのちゃんと会えた。

「龍宮。私は先生の方へ着くよ」

「なら私も先生に着くよ。刹那に雇われている身だしね」

「私たちも手を貸してやる。行くぞ茶々丸」

「なつー?」

ガンドルフイーーが驚きの声を出す。まあ、ずっと話していた相手がいつの間にか仲間を増やしてたらどうなるか。まあ、もう少し驚いてもらつかな。スキマを開く。萃香か魔理沙あたりが面白そうとか言って出でてくるだらう。そう考えていると

「わはー」

「お久し振りです。時取さん」

予想外の一人が出てきた。

第四話／幻想の弾幕

「わはー」

「お久し振りです。時取さん」

時取が空間を割いたと思ったら中から一人の人物が出てきた。一人は腕を横に広げてふわふわと浮かんでいる金髪の少女。もう一人はメイド服を着た銀髪の女。小さいほうからは人の気配がしないおそらく妖怪か。それにあのリボンは封印か？銀髪の女は隙が見えないそれに武器をいくつか隠しもつているようだ。こいつらが幻想郷とやらの住人か？

「久しぶりだな二人とも。でもなんでお前らが？」

ルーミアと咲夜が来た。ルーミアはともかく咲夜が怪しいスキマに入るとは思えないのだが。

「おいしそうな匂いがしたのだー」

「お嬢様が面白い運命が見えたと言つていたので」

まあ、納得の理由だな。

「ちょっと手を貸してくれ

「なんなりと」

「それよりあの人たちは食べてもいい人間？」

ルーミアは相変わらずだな。

「食べてはいけない人間。手伝ってくれたらいつもの食べさせてあげるから」

「そーなのかー」

「とりあえず、周りの人達を殺さないように適当に動きを止めてくれ」

「わはー」

「わかつたわ」

そういうとルーミアは右側、咲夜は左側の魔法使い達に向かいあつた。桜咲たちもそれぞれ二人のサポートに回つた。

「さあ、魅せてやろうたつた一人の百鬼夜行を…まあ、耐えられるならな」

ポケットからカード一枚出して呟く。

「虚偽「囮い火蜂」」

「咲夜といったか。私たちが手を貸そう」

ナイフを構えるメイドにそう声をかける。

「あなたは？」

「エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル。 真祖の吸血鬼だ。 こ
つちは従者の茶々丸だ」

「絡繆茶々丸です」

「私は紅魔館でメイド長を務めさせていただいております。 十六夜
咲夜と申します」

「ピクッ

「紅魔館？… そりがあいつらの従者か」

「お嬢様を知っているのですか？」

「懐かしいな。

「昔の遊び相手だ。 咲夜、後で我が家に招待しよう。 レミリアたち
のことを聞かせてくれ」

「喜んで参りまじょう。 お嬢様たちへのいい土産話になります」

「それならさうひと終わらせるか」

「そうですね」

「そういうと咲夜がカードを取り出しつぶやいた。

「幻符「殺人ドール」」

ルーミアさんの助太刀に来たんだが…。

「わはー」

無数の攻撃魔法を軽々と避けていく。

「そんなんじや 当りないぞー」

空を自由に飛びながら様々な光と踊るように避けていく。

「綺麗…」

自然と口から零れた。

「それじゃあ今度はこっちの番よ」

彼女はポケットからカード一枚出すとこう呟いた。

「月符「ムーンライトレイ」「

「虚偽「囲い火蜂」」

無数の蜂の形をした弾幕が魔法使い達を囲み無数の針を放つ。その針を受けた魔法使い達が高熱により次々と倒れていく。

「幻符」「殺人ドール」

無数のナイフが魔法使いたちに襲いかかる。ある者は自らの武器を弾かれ、ある者はナイフで地面に縫いつけられる。

「月符」「ムーンライトレイ」

一つのレーザーに挟まれ逃げ場を失った魔法使いが次々放たれる弾幕を避けきれず倒される。

「お前達に教えてやるつ。恐怖をから生まれた妖怪も信仰から生まれた神もそれを生み出した人間でさえも俺は殺せない。俺を殺せるのはこの無慈悲なる時の流れのみ。そして、その流れが新たに俺を生む」

「私の手品はどうだつたかしら。本当の手品にはタネも仕掛けもないものですよ」

「光り強ければ強いほど闇は大きく在れるものって纏静がいってた」

倒れた魔法使い達にそれぞれが言葉を残す。

「 「 「 (私たちなんにもしない...) 」 」 」

第五話～幻想郷縁起～

「つむねれゅ。

「……」

魔法使い達を倒して今はマクダウエルの家にいる。

「つ」。

「……」

だけど誰も何も話さない。ビーフしたんだ?

ちゅーちゅー。

「……おい」

やつと口を開いたか。

「なんだ?」

「左腕は大丈夫なのか?」

……あ～そうこうとか。向こうでは当たり前だったからな。

「大丈夫だ。」「ふはあ。」馳走さまなのだー」この通りすぐに生え
るから」

今まで左腕を覆っていた闇が晴れるとルーミアが満足したようでのまま寝転がる。そのルーミアの口についた血を咲夜がハンカチで拭きとる。

「さてと、それじゃあ話を始めるか。なにから聞きたい？」

そう聞くと龍宮が手を上げ聞いてきた。

「まず、幻想郷について聞きたいんだが…」

「簡単にいえば人と妖怪が共に住む箱庭だ」

山奥にあつた人と妖怪の隠れ里を結界によって隔離させた場所が幻想郷。人と妖怪が共に住むと言つても問題があつた。ほとんどの妖怪が持つ本能。つまり戦闘本能。これを解消するためにある決闘方法が生まれた。弾幕ごっこ。正式名称スペルカードルール。人間でも妖怪でも妖精でも神でも対等に戦えるようにするルールだ。今で言つシユーティングゲームだ。避けることに重点を置いたな。このルールのおかげで妖怪は人を襲わなくとも力を保てるようになり、人間も、といつてもごく一部の力を持つ人間だけだが妖怪が起こした異変を自分たちで解決できるようになった。それと幻想郷の住人は能力を持つことがある。「～程度の能力」と俺達は呼んでいるが、闇を操る程度の能力や時を操る程度の能力のように戦闘に使えるものから春を伝える程度の能力や手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力のように戦闘にまったく使えないものまで様々だが応用がかなり効くから幻想郷の実力者はほとんど能力持ちだ。昔はそうでもなかつたんだが今では幻想郷以外で能力を持っている奴を見たことがないな。

「幻想郷についてはこれくらいか」

うん。やっぱり茶々丸の紅茶は美味しいな。咲夜の入れる物と同じくじこづまー。

「お前のことを教える」

全く偉そだなこのちびっ子は。俺のこと……確かスキマに幻想郷縁起があつたな。

「ちょっと待てよ……あつあつた。ほれ」

スキマから出した幻想郷縁起を出す。

「幻想郷縁起?」

「幻想郷の実力者のことまとめたものだよ。咲夜とルーニアのことも書かれているから」

ペラッ

紅魔館のメイド

十六夜咲夜（こさかよこせくや）

能力 時間を操る程度の能力

危険度 低

人間友好度 高

主な活動地域 紅魔館

紅魔館のメイド長を務める紅魔館唯一の人間。メイド長といつても彼女以外のメイドは全て妖怪であり、主に自分のことだけで手いっぱい。ゆえに紅魔館の仕事の九割九分九厘を彼女一人で行っている。

能力

時間を操る程度の能力を持つている。人間が持つている能力にしては最大級の強力な能力である。時間を操る彼女の力でも時間を戻すことはできない。せいぜい移動していたものを元の場所に戻す程度である。また、時間と空間には密接な関係があり彼女は応用で空間も操ることができ。紅魔館の中が外見以上に広いのはそのためである。

目撃報告例

- ・宴会の時は助かるわね。準備から片づけまで完璧だから。どつかの白黒とは違うわ。（博麗靈夢）
流石メイド長である。
- ・いきなり後ろに立たれると心臓に悪いぜ。音も気配もないんだから。（霧雨魔理沙）
あなたが本を盗まなければいいのでは？

対策

紅魔館に敵対しない限り敵に回ることはないだろう。万が一機嫌を損ねるようなことをしてしまったら珍しいものあげるといいだろう。彼女は珍品を集めるのが好きらしい。

宵闇の妖怪。

ルーミア

能力 閻を操る程度の能力

危険度 高

人間友好度 普通

主な活動地域 博麗神社（時取纏静のいる場所）

妖怪ではかなり強い部類に入る妖怪。妖力の多さだけなら時取纏静に次ぐ多さである。彼女は時取纏静との付き合いが長くよく彼の腕を食べている姿がよくみられる。（一）

頭のリボンは封印で強すぎる力を時取纏静が押さえるためにつけたものらしい。

一人でいるときは常に闇を纏つてふよふよと当てもなく飛んでいる。

能力

文字通りの闇を操る能力である。基本的には自らが出した闇を纏っているところしか見たことがない。彼女が言つには影も操れるらしい。

この妖怪に纏わる逸話

・常夜異変

幻想郷が数日間夜が明けなかつた異変。彼女が言うには寝てゐる間勝手に闇が出たとのことらしい。おそらく制御しきれなかつた妖力が漏れ出したのだろう。時取纏静がリボン型の封印をつけてからはこんなことはなくなつた。

目撃報告例

- ・たまに纏静が腕に闇をつけて歩いてることがあるけどあれは何をしているのかしら。（博麗靈夢）
- ・おそらくは彼女がお食事中だつたのだろう。
- ・あいつの闇の中はひんやりして気持ちがいいんだ。（霧雨魔理沙）
- ・闇の中は涼しいらしい。

対策

彼女が空腹の時に出来つと問答無用で噛みついてくる。何か食べ物をあげれば簡単な頼み事は聞いてくれる。常に食料を携帯しておぐといいだろう。

（一）妖力が多いのはおそらくこのためだと思われる。

自称限りなく人間に近い妖怪。幻想郷創始者。幻想郷最強。人妖継想神。

時取纏静（ときとりてんせい）

能力 ありとあらゆるものを受け継ぐ程度の能力

危険度 極低（ 1 ）

人間友好度 極高

主な活動地域 博麗神社

幻想郷のもととなる隠れ里を作った人。幻想郷最強の人物。人間と変わらない姿をしているがその正体はしでの鳥という妖怪。ホトトギスの妖怪で簡単に言えば転生を繰り返す寿命以外で死なない人間らしい。（ 2 ）

外の世界の妖怪や半妖、人間をスカウトに行くことが多く幻想郷にいることはあまりないが幻想郷で誰かの死期が近づいた際は必ず戻ってくる。誰かが死ぬとき彼はその人の想いを受け継ぎその人家族や友人にその想いを伝える。人も妖怪も関係なく想いを受け継いでくれるので人と妖怪どちらからも信仰され人妖繼想神と呼ばれている。（ 3 ）

幻想郷にいる間は基本的に博麗神社でのんびりしている。

能力

文字通りの能力である。彼によると能力でさえも受け継ぐことができるらしい。幻想郷のほとんど能力は使えるらしい。（ 4 ）また才能や技術も受け継いでいるため基本的に何でもできる。

この妖怪に纏わる逸話

・外魔異変

数千人単位の外来人が幻想郷に攻めてくるという異変。彼が言うには彼らは外の世界の自称正義の魔法使いだつたらしい。何でも幻想郷を化物の巣窟だと決めつけて襲つてきたようだ。

当時から生きてきた妖怪の話によると

・鬼だ。鬼がいた…。（ある鬼）

どうやら鬼さえも恐れるほどの戦いつぱりだつたらしい。

・あの時の彼はすごかつたわ。ぞくぞくしちやつた。また戦いたいわ。（風見優香）

大妖怪と戦いながら数千人の魔法使いを相手に戦える彼は限りなく人間に近い妖怪とは言えないんじゃないだろうか。

以上のことから幻想郷最強の称号は間違いないようだ。

目撃報告例

・纏静がいる間はいいわね。参拝客も来るしあいしいご飯も食べれるし。（博麗靈夢）

幻想郷にいる間彼は博麗神社にいることが多い。そのため彼がいる間は人妖問わず参拝客が多い。頼めば外の料理を作ってくれることもある。

・毎回違うスペルカードを使つてくるから何度も楽しいぜ。

（霧雨魔理沙）

妖怪や怪異を模したスペルカードをよく使う。彼が言うには対処法を知っている人ならば通常の弾幕以上に簡単なものもあるらしい。

・纏静の腕は美味しいのだー。（ルーミア）

宵闇の妖怪に腕を上げていてる姿が度々目撃されている。彼が言うには丁度食料を切らしてたかららしい。だからと言つて腕を上げるのはどうかと思う。

・宴会の途中でいつも一人酒を始める。その時の纏静はなんか近寄り辛い。（伊吹萃香）

彼は最古の妖怪だ。何か思うことでもあるのだろう。

・彼だけです。私の話をちゃんと聞いてくれるのは。（四季映姫・

ヤマザナドウ）

転生を繰り返すたびしつかりとありがたい言葉を受け取っているらしい。

対策

対策も何も、誰にも倒せないし、よっぽどのことがない限り誰に対しても友好的である。頼まれごとも大体のことは引き受けてくれる。もし敵対することになつたら覚悟した方がいい。彼を敵に回すということは幻想郷の全ての人物を敵に回すということだ。まあ、そんなことする人は幻想郷にはいないだろうが。

- （ 1 ）向こうから攻撃してくることはあり得ない。
- （ 2 ）かなりマイナーな妖怪らしい。本来は無自覚なため本人も自身が妖怪だと気付かない場合がほとんどらしい。
- （ 3 ）本人は納得してないらしいが彼以外の全員が納得している。
- （ 4 ）能力によっては本人のように使えないものもあるらしい。彼が多く使用する能力はどううまく使えるみたいだ。

バタン

「チートめ」「チートだね」「チートですね」「チートかと思われます」

「ひどくない？」

第五話～幻想郷縁起～（後書き）

この世界での幻想郷では元から人間と妖怪が共に住んでいたので人間友好度は高めです。

スペルカード説明

虚偽「囮い火蜂」

紅い蜂型の弾幕で敵を囮む。その蜂から針型の弾幕を放つ。基本的に隙間が多く空いてるのでさほど難しくもない。任意によって弾幕に当たった相手を高熱にすることができる。

第六話～スキマ～

学園長室

纏静に返り討ちにあつた魔法使いが集まつていた。

「学園長！即刻彼を排除すべきです！」

「穏やかじゃないのう。彼によつて西の妖怪による被害が減つたんじゃないぞ？なぜ彼を排除しないといけないんじや？」

事実纏静が来てからの妖怪を使っての襲撃はほぼ零になつた。

「彼は危険です！内側から崩すために西から送られた刺客に決まります！」

「うふふふ。なかなか面白いことを言つてますのね？あんな人が西にいたら内側から崩す必要ないじやない」

そこにはいたのは田舎をさし扇子で口元を隠して笑う少女の姿が。

「君は誰かの？」

「八雲紫。あなたには妖怪の賢者と言つた方がわかりやすいかしら？」

「もしや幻想郷の…」

「そうあなた方が滅ぼそつとした幻想郷の住人です」

「で、その妖怪の賢者が何の用かの？」

「何も分かつてない彼らに忠告をと腮こまして。彼を排除するなんて不可能なことをしようとしてる彼らにね」

「不可能だと？」

八雲紫の言葉に怒りをあらわにする魔法使い達。

「ええ、不可能ですわ。この世の誰にも彼を殺すことなんてできませんわ」

「馬鹿馬鹿しい。たかが妖怪程度に後れを取る我々ではない

「そう言つて幻想郷に攻め込んできた数千人の正義の魔法使いを誰一人殺さずに追い返したんですよ？彼は大妖怪風見幽香と戦いながらね」

「風見幽香だと…？」

「フーフーマスターは死んだんじゃないのか…？」

かつて魔法使いを苦しめていた風見幽香の名で魔法使い達が騒ぐ。

「そんな話嘘に決まっている…」

「わたしたちが負けるはずがない！」

魔法使いが声を荒げる。自分たちが信じている正義に縋りながら。

「なら、あなたたちは不死者を殺せますか？あらゆる方法を使いそ
の者の魂さえも消滅させることがありますか？彼を相手にその方法
が使えますか？出来るのならぜひひ試してください。死が彼を受け入
れようとした瞬間…」

ハ雲紫の扇子が閉じられ彼女の笑みが消える。

「幻想郷の全てがあなたたちの存在を否定します。人々に忘れ去ら
れた幻想があなた達を無に変えます」

エヴァ宅

「それじゃあそろそろ一人を幻想郷に送りうつか」

纏静がスキマを開けると紙が落ちてきた。

「なんだこれ？」「結界の調整のためしばらくの間幻想郷を完全に隔
離します。その間一人のことよろしくね。ゆかりんより」…おい、
スキマ」

スキマに手を突っ込みハ雲紫を捕まえる。

「何よ。これから結界の調整で忙しいの」

「お前が結界の管理を全部藍に丸投げしてるからだろ。帰るついで
に一人も連れてけ」

「だめよ。これ以上私以外が通るとややこしくなるもの。ちゃんと一人の周りの人から許可はもらつてゐるわよ。まずはルーニア」

紫がスキマから数枚の紙切れを出して言ひ。

「わたしかー？」

「慧音から」「これを機により一層勉学に励んでくれ。しつかり纏静のことを聞くんだぞ」だそつよ

「わかつたのだー」

「あとチルノから「なんかよくわかんないけどあたいつたらセイきょーね」……じゃあなんで書いたのかしら?」

「わはー」

他の皆は苦笑いをしている。

「次に咲夜」

「みんなはなんと?」

「まず中国「紅魔館の」とは任せください。しっかりと手つて見せます」寝てるのを起こして書かせたわ

「中国…帰つたらお仕置きね」

さて咲夜さんその手にあるナイフは一体何に使つつもりですか？後いい加減名前で呼んであげてください。中ご…美鈴が可哀そうです。

「次にパチュリー」「帰つてくときたゞひの魔術書をいくつか持つて来て頂戴。あと中国のことは小悪魔に任せたから」「小悪魔からは『何やっても起きないんですけどどうすればいいんですか?』」

「このナイフを小悪魔に」

力いっぱい握っていたナイフを紫に渡す。

「次にフランデールから「外の話いっぱい聞かせてね~」

「フランお嬢様…」

「最後にレミリア「外の世界に行くにあたつてあなたに一つの仕事を与えるわ。一つはメイドとして纏静に使えること。彼に付き添い様々なことを学びなさい。一つは必ず無事に帰つてきなさい。あなた以外で今魔館のメイド長が務まる人なんていないのだから」

「お嬢様：必ず戻ると伝えてください」

「わかつたわ。最後に纏静。靈夢からよ

「靈夢から?」

俺にまであるのか?

「わたしの食費が死きたわ。速く帰つて来て」「だって

「お前が何とかしろ」

「わかったわよ。…ああそれとその一人は学校に通つてになるから

「そーなのかー」

「わかりました」

「おい待て、学費やら生活費やらは誰が払うんだ?..」

「あなたに決まってるじゃない。ああそれと二人に丁度いい仕事を学園長からもらつたからそれで何とかしてね

このスキマは人の都合を考えず次から次へと。

「住む場所はどうするきだ?..」

「(一)の近くの土地が使えるようになつたから。あなたなら家の一軒や一軒簡単でしょ?..」

俺が怒らないとでも思つてんのか?

「わかつた。もうないだろ?..な。さつと戻つて結界の調整を始める。一度と俺の前に現れるな

「つれないわね~。あつとそつだ

「なんだ?..」

落ち着け俺。これは紫の作戦だ。俺を怒らせて冷静さを欠くつもりなんだ。

「結界の調整手伝ってくれない？」

ブチッ！

「人が大人しくしてればいい気になりやがつてこのスキマババアア
アアアアアアアア ! ! ! ! ! 妖刀「心渡り」 ! ! ! ! !

スペルカードを発動し一本の刀を振りかざす。

「ちよつとしたお茶目じゃない！ちよつとその方本当に危ないんだ
って！ああもう、それじゃあまたね！」

「はあはあ」

刀を落しソファに座る

一時取扱い停止です

咲夜かいつの間にか置薬を用意していた。それを飲み咳く。

俺も従者欲しいなあ

主に紫を追い払うために。さてと家を作らないとな。

第六話～スキマ～（後書き）

スペルカード説明

妖刀「心渡り」

鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の怪異殺しから受け継いだ妖刀。

妖怪相手に絶大の攻撃力を誇る。

第七話～対話～

「かくかくしかじかじやわかなないよ時取先生！一人との関係は！十六夜咲夜とルーニアだみんな仲良くなー」

「かくかくしかじかじやわかなないよ時取先生！一人との関係は！？後なんかキャラ変つてない？」

全くそういうことは察してくれよ。俺だつて忙しいんだ。

「一度しか言わないからよく聞けよ。知り合いの自己中心的ではた迷惑な奴が自分の仕事をしつかりしないために其のつけが回つて来てそのせいで一時的に一人が帰れなくなり昔からの知り合いだつた俺にこちらの都合も考えず預けついでだからと学校に通わせることになった。一人の住むところだが森の方にある家を借りて昔から交流のある俺と一緒に生活することになった。キャラが変わってるのはここ最近素で話すことが多くなつて敬語と使い分けるのがめんどくさくなつたので今日からこのままでいく。一人の席は一番後ろの列だ。マクダウェル。一人にいろいろ教えてやつてくれ。俺はこれから学園長と一人のこといろいろと話があるから一時間目の俺の授業は一人への質問の時間にする。ネギ先生それじゃあ後は頼みます」

はあ～めんどくさい。

学園長室

「はあ～～

エヴァの呪いに時鳥君と幻想郷の一人。問題が山積みじゃのう。

「ンコン

「時取です」

「入りなさい」

問題なのは彼らじゃなくて我々じゃがの。

「二人のことあります」

「いいんじゃよ。それより聞きたいことがあるんじゃが

「なんだ?」

「なぜ君は普通の教師としてここに来たんじゃ? 魔法先生としてくればいろいろと都合がよかつたのにのう

なぜって言われてもねえ。

「いくつか理由はあるけど一番の理由は正体を隠すため。普通に生活する分には正体がばれる」とはないからな。今回は手違いでばれてしまつたが…」

魔法使いと関わりたくなかつたつてのが本音だが。

「それで一人のことじやが

「危険はないぞ。咲夜は人間だし、ルーニアもよほど腹を空かせない限り安全だ。俺が面倒みるしな」

「なら心配はないかの」

「それより紫がいつていた仕事つて何なんだ？食費や学費なんか全部俺が持つことになつてな。俺の給料じや養えそうにない」

主に食費が。

「うむ。君たちには夜の警備員をやつてもらいたい」

「警備員？」

「うむ。君が来てくれたおかげで妖怪の襲撃は減ったがそれでもまだ侵入者が多くてのう」

「別にかまわないが、後ろからいきなりグサリなんていやだぞ」

俺やルーニアはともかく咲夜は人間なんだから。

「そのことにについてはしばらくは君の所の生徒と一緒に回つてもらおうかと思う。しばらく仕事をしていれば先生たちも危険がないとわかってくれるじゃう」

樂観的だな。

「で、それはいつから始めるんだ？」

「今日の夜に一度顔合せると模擬戦を行つてもうじゅ

「今日の夜か。準備もできたしついでに……。

「模擬戦の後マクダウェルの呪いを解くがいいか?」

「かまわんよ。もともと三年で解けるはずだったしの。その代わり」と言つてはなんだが

「なんだ?」

「ネギ君を鍛えてくれんかの?」

第八話～咲夜の世界～

夜。世界樹前の広場に俺、ルーミア、咲夜の三人で向かう。

「それで学校はどうだった？」

両隣りを歩いている二人に聞く。

「とても楽しかったです。今度、五月さんに料理を教えてもらひつことになりました」

「そうか。いい機会だからいろいろ学べ。五月の料理の腕は麻帆良一だからな。ルーミアは？」

「超に肉まんもらつたのだー」

「なら今度超がやつてる店に行くか」

「わはー」

あの化け物クラスに馴染めるか心配だったがよくよく考えてみたら幻想郷の奴らに比べれば全然大したことないな。

「よく来たな三人とも」

広場に着くと以前戦つた時よりも多くの魔法使いがいた。一部の魔

法使いから明らかに敵意を向けてくる。まあ、無視していいだろ。

「まあ、ほんどの者は知っているだろ？が紹介しよう。此度から夜の警備を共にすることになった、時取纏静くん。ルーミアくん。十六夜咲夜くんじや。今夜は彼らの実力を見るために模擬戦を行う」

模擬戦かとりあえず実力順で行く方がいいだろ。

「じゃあ、こいつちは咲夜から行こうか」

「わかりました」

咲夜がナイフを出しながら広場の真ん中に立つ。さて向こうは誰が来るのかな？

「私が行こう。我が友の従者の実力を見ておきたい」

エヴァが咲夜の向かい側に立つ。封印状態でどう戦つか見ものだな。

「両者とも準備はいいかの？……では、始めつ」

先に動いたのは咲夜だつた。後ろに飛びながらナイフを投げ距離を取る。それをエヴァは指を向けるだけで防ぐ。あれは糸か？

「「咲夜の世界」」

「「咲夜の世界」」

咲夜以外の全てが止まつた世界。文字通り咲夜の世界だらう。その中で咲夜がエヴァに近づいて行く。

「なるほど糸を操つてナイフを防いだんですか」

ナイフを回収しながら呟く。

「セドリックさまでしょうか？」

封印されていいるエヴァさんは普通の少女の体力ぐらいしかないし再生もできない。時取さんがいるから大事には至らないだろうがかといつてお嬢様のご友人を傷つけるわけにはいかない。だからってお嬢様のメイドとして負けるわけにはいかない。

「とつあえず、動きを止めましょうか」

ナイフが服を地面に縫いつけるように投げる。もといた場所に戻ると能力を解除し言葉を呟く。

「そして時は動き出す」

「そして時は動き出す」

咲夜が呟いたかと思うと田の前に無数のナイフがあった。なるほどこれが時を操るということか。しかもじ丁寧に私には当たらんようしているが。

「舐めるなっ！」

おやじく私の服を縫い付けようとしているであろう攻撃を避けるため。糸を操り自分を後ろに引っ張り避ける。それと同時に糸を咲夜に向けて飛ばす。

「くつーーー？」

糸が咲夜の足をとらえそのまま釣り上げる。

「十六夜咲夜。私を傷つけてもかまわんお前の本気を見せてみる」

あいつらの従者がこの程度のはずないだろ。

糸を切り時間を止める。確かに傷つけずに勝つなんて虫がいい話か。ならー！

「ぐつーーー？」

エヴァさんに近づき拳を振るう。拳がほぼ零距離の状態の時に時間を戻す。吹っ飛んでいくエヴァさんをおい追撃を狙う。

「これでーーー？」

エヴァさんがカウンターを狙い腕を取ろうとした瞬間時を止めナイフを投げる。時を戻してエヴァさんがのけぞって避けたところを足払いをしの匕元にナイフを突き付ける。

「封印されでいるとはいえ私を傷一つ付けずに倒すとはな。あいつらはいい従者を見つけたようだな」

「最高の褒め言葉です」

「セーラードージャ」

たとえお嬢様の「友人でも負けるわけにはいかないお嬢様と共にいるには完璧でなければいけないのでだから。

第九話～闇の少女～

「よくやつたな咲夜」

戻つて来た咲夜に労いの言葉をかける。

「ありがとうございます」

頭を下げた後、俺の左隣に黙つて立つ。あ～ほんとに咲夜みたいな従者欲しいわ。

「わたしにはお嬢様がいますので」

「どうやら顔に出ていたようだ。」

「次はルーミアの番なのだー」

俺がそう思つているうちにルーミアが両手をあげて彼女曰く聖者は十字架に磔られましたのポーズをとり広場の真ん中にふよふよとんでいく。魔理沙はあのポーズを見て人類は十進法を採用しましたって見えるとかいつていたけれど俺にはこれからダブルラリアットしますつて見えるな。……どーでもいいか。

「誰が相手なのだー？」

「私が行きます」

そつ言つて出でてきたのは氷のよつに透き通つた少女。この感じは…。

「女子高等部一年。雪風氷花です」

「そーなのかー。私はルーミアなのだー」

挨拶を終えると雪風は距離をとる。

「一人とも準備はいじゅうじゅの。始め!」

先手を取つたのは雪風だつた。片手をルーミアに向けて

「穿孔氷柱!」

鋭い氷柱を無数に放つた。

「穿孔氷柱!」

その攻撃を見てルーミアの顔に自然と綻ぶ。ああ、これはまるで弾幕のようだと。相手が弾幕で来るならこちらがやることは一つ。

「夜闇」「太陽の母」

闇の美しさで相手を魅了し打ち倒すのみ。そう思った彼女の背後には夜をも覆う闇が現れその闇から大玉の光弾がいくつも飛んでいく。相手の雪風は地を駆け彼女の攻撃を避けながら氷柱で攻撃を仕掛けてくれる。

「氷翼」

私のスペルが終わった直後雪風が氷の翼で飛ぶ。彼女が羽ばたくた
び氷の粒が弾幕と化して私に襲いかかる。それ避けながら飛びカ一
ドを出し宣言する。

「冥符」「遙か地下からの暗黒」

地面が一瞬にして闇に染まりそこから次々と漆黒の球が撃ち上がる。
雪風は必死に上へ上へと逃げるが翼に被弾してしまって落ちる。氷の
翼を展開しようとするとがつまくにかず雪風は瞳を閉じた。

「闇よ」

『闇よ』

そんな言葉が聞こえた言葉が聞こえたかと思つと何かに乗る感覚が
した。恐る恐る目を開けるとゆつくりと自分が下りていた。自分を
支えているものを見ると黒い何かだった。触つてみると意外と柔ら
かく心地よい冷たさだった。ふにふにふに。

「どう、私の闇は？」

「ひやーいつー？」

後ろを見るヒルー//アさぶがにやにやと見ていた。恥ずかしい。

「あつ。はい。気持ちいいです…」

「モーなのかー」

ルーミアさんの顔がにやにやから「一ノ一ノ」に変わった。何、この可愛い子。お持ち帰りしたい。

「ねえ、また今度弾幕『じつ』にしてくれない?」

「弾幕『じつ』?」

「幻想郷の決闘方法だよ。さつきみたいにお互い弾幕を打ち合つて相手を落としたり相手の技を全部攻略すれば勝ち。人間も妖怪も関係なく対等に戦える遊び」

ルーミアさんの「弾幕『じつ』」は私の戦闘方法を鍛えるにはぴったりだ。それに何より彼女との戦いは楽しかった。

「いいですよ。また、一緒に弾幕『じつ』しましょう!」

「わはー」

私が「了承すると笑顔で私の周りを飛び始めた。あー、ほんと可愛い。

ルーミア達が下りてくると何か笑顔で話した後こっちに戻ってきた。

「どうした? うれしそうな顔して」

俺の隣で今にも鼻歌を歌いだしそうなほど上機嫌なルーニアに訊ねる。

「今度、氷花とまた弾幕『』じをすることになったのだー」

なるほど、やつきの戦闘は確かに弾幕『』じだった。あれなら少しコツを教えるだけで彼女はむしと強くなるだろつ。なら…。

「彼女にスペルカードでもあげるか」

「本当なのかー」

「ああ、彼女には才能がありそうだからな」

「その前に…」。

「俺の相手は誰だろうな」

楽しめる相手ならいいんだが。

第九話「闇の少女」（後書き）

スペルカード説明

夜闇「太陽の母」

ギリシャ神話の夜の女神ニユクスが昼の女神ヘメラを生んだ話をイメージして作り上げたスペル。自分の後ろに闇を展開させそこから太陽をイメージした大玉の光弾をいくつも放つ。

冥符「遙か地下からの暗黒」

同じくギリシャ神話の地下の暗黒の神エレボスをイメージして作ったスペル。地面を闇で埋め、漆黒の球をいくつも上空へ放つ。遙か地下からの言葉通りかなり深く飛べない相手は闇に沈む。運が良ければ球に押し上げられて外に出られるが基本的にルーミアが出さない限り出れない。

第十話～受け継がれ～

「さてと、俺の番か

ゆうぐりと広場の真ん中に向かつ。タカミチあたりが相手かな。

「僕が行きます」

タカミチがポケットに手を入れたまま出でくる。行儀悪いな。

「では、始め！」

「フッ！」

「こきなりかよ..」

試合開始と共に放たれた拳圧を走りながら避ける。ていうか、わざわざポケットに手を入れる必要はあるのか？普通に殴った方が速そうだが。

「攻撃してこないのかい？」

「あまり手の内は見せたくないんだよ。いまだに悪意のある田で見てくる人もいるしね。まったく、俺が何したっていうんだ」

「それは

苦笑いしているタカミチの周りを走りながらポケットを探り一枚のカードを出す。

「長い引くのもなんだしさつあと終わらせるよ」

「やつ簡単にはいかないよ」

「こくそ。俺には心強い仲間がたくさんいるからな」

走るのをやめてスペルカードを発動させる。

「想起「果てなる地に住まう人が恐れし強き者達」」

自らが受け継いだ彼らの想い。今この時、我が体は彼らと同じ鬼と化す。この手は全てを打ち払い。この足はただ前へと進み。この想いは決して曲がらない。

「咸卦法…豪殺居合い拳…」

「ぬるー」

咸卦法で強化された居合い拳をただ殴り返す。それだけで風が荒れ地面が揺れる。そのままタカミチの前まで攻撃を捌きながらゆつくりと歩いて行く。

「まだやるか?」

「参った。僕の負けだよ」

「やつ今までじや。これで彼らの力量はよくわかつたじやう。それではこれよりエヴァンジョンの呪いを解く。何か文句のある者はあるかの?」

学園長が魔法先生、魔法生徒一人一人を見て確認する。俺を殺してまで止めようとしたのに誰も何も言わないのかよ。まあ、学園長かタカミチがなんか言つたか？

「誰もいよいよじやの。では纏静くん頼むぞ」

「了解。マクダウェルこっちこーい」

咲夜の隣にいたマクダウェルを呼ぶ。

「本当に解けるんだろ?」

「解くと言つよりは移し替えるかな?」

マクダウェルの頭に手をのせながらそつと言つ。

「どうこいつことだ?」

「うへこいつ」と。マクダウェル、お前の呪い俺が受け継ぐ

「なつー?」

そう俺がいうとマクダウェルを縛つていた呪いが俺を縛る。

「バカかつお前! そんなどいたらお前が呪いに…」

「文句は最後まで見てから言え」

叫ぶマクダウェルを軽くあしらい。スキマから自分を模した人形を

取り出す。自身の呪いを人形に受け継がせる。俺を縛っていたものが今度は人形を縛る。

「お前の能力は受け継ぐだけじゃなかつたのか？」

「応用が利くつて言つたろ？受け継ぐつてことは繋げていくつてことだ。過去から未来に人から受け継いで人に受け継がせる。これが俺の能力の本質だ」

「チートめ」

「そのチートのおかげでお前の呪いは解けたんだ。感謝しろよ？」

軽く頭を撫で家に向かって歩き出す。マクダウェルの呪いが解けたのを確かめると解散させた。

「時取纏静か…。でたらめな奴だ。今年は退屈しないで済みそうだ

な
「

第十話～受け継ぎ～（後書き）

スペルカード説明

想起「果てなる地に住まう人が恐れし強き者達」
ドーピングタイプのスペル。今まで受け継いできた鬼達の力を開放する。驚異的な身体能力を得る代わりに正々堂々な行動しか取れない、異様に酒が飲みたくなるなど制限が付けられる。

第十一話「スペルカード」

日曜日、朝、時取家。

「おはようございます。時取さん」

「おはよう。咲夜」

咲夜が継いでくれた緑茶を飲みながら座椅子に座り部屋を見渡す。

「でねつ！そのお店の料理がすっごく美味しいの！」

ルーミアを抱きしめながら、畳の上をぐるぐる転がる雪風氷花。

「そーなのかー」

料理の話に嬉しそうな顔をしながらいつもの言葉をいうルーミア。

「なんだこの家はーなんにもないではないかー！」

我が物顔で座りながら机の上せんべいをバリバリ食いつマクダウエル。

「咲夜さん。お醤油はどう？」

咲夜と一緒に朝飯の準備をしている茶々丸。

「お邪魔しています。時取さん」

お皿を準備してこる桜咲。

「お邪魔してゐよ。時取さん」

同じくお皿を準備している龍宮。

うん。いつも通りの騒がしい朝だな。

「…………」馳走様でした

さてと飯も食い終わったことだしマクダウエルを外に放り投げて、

「じゃあ、スペルカードの説明をするか」

「…………」ようじくお願ひします

「ちょっと待てぬー」

雪風たちにスペルカードの説明をしようとしたらマクダウエルが飛び込んできた。

「なんだ穀潰し。邪魔するな」

「つぬねこつ！穀潰しどはなんだー！私にも教えろー！」

しうがない。マクダウェルを雪風の隣に座らせスペルカードの説明を始める。

「スペルカードは自身の力を札に封じ込めるもの。作る利点としては技名を唱えるだけで発動できる。込める力の量によつて威力を変えられる。何度も使える。主にこの三つだな」

雪風はメモ帳にメモしながら聞き、桜咲と龍宮は授業のよつこきちんと聞き、マクダウェルはせんべいを喰いながら聞いている。肥えてしまえ。

「はいー質問です」

「はい、雪風君」

元気よく手をあげる雪風を指す。

「技名を唱えるだけで発動できるといつことですが、それは闇討ちなどに使えないといふことですか?」

「いい質問だ。雪風君にはルーミアを愛でる権利をあげよう」

「やつたー。ルーミアちゃん」

俺の隣にいたルーミアを膝の上に載せ思つ存分愛でている。

「質問の答えだがやひつと思えばできる。その代わり普通以上の力を使い威力も著しく低下する。スペルカードは弾幕ごつこのためを作ったものだからな。不意打ちや闇討ちなどはやらないことを前提に置いてある。カードを見せながら「喰らえつ!」とか「行くぞつ!」とかとにかく相手に何かを使うことを云えれば技名じやなくてもいいけどな」

咲夜にお茶のお代わりを頼み話を続ける。

「次にスペルカードは主に五つのタイプに分かれる。

一つ目は弾幕タイプ。これは一番基本的なタイプだ。大量の弾を放ち弾幕を形成するタイプだ。メリットとしては攻撃が当たりやすい。相手が回避等に専念するために相手の攻撃を止められる。デメリットとしては一発一発のダメージが低い。

二つ目はパワータイプ。極太レーザーや大玉の球を放つタイプだ。メリットは一発一発のダメージが大きい。デメリットは隙が大きくなること。

三つ目はストレスタイプ。レーザーや弾で相手を囮つたりして行動を制限するタイプだ。メリットは弾幕タイプ以上に攻撃を当てやすい。デメリットは複数相手では使えないこと。

四つ目は奴隸タイプ。式神などを操り多方向から攻撃するタイプだ。メリットは一時的に一対多の場面を作ることができる。デメリットは操ることに集中して自分に隙ができるやすい。

五つ目はドーピングタイプ。一時的に自分の能力をあげるタイプだ。メリットは普段以上の力を使える。デメリットはそれなりに負担もかかる。

主にこの五つだ。これ等のタイプを組み合わせてスペルカードを作れる

ポケットからいくつかのスペルカードを出し机に並べる。

「スペルカードを作るにあたって大事なことが二つある。一つはイメージ。一つは名前だ」

「イメージと名前ですか？」

桜咲の言葉に頷き説明を続ける。

「イメージの方は解るだろう曖昧なイメージじゃスペルも弱くなってしまう。より確固なイメージがスペルを強くする。名前はスペルカードにとって最も大切なもんだ。適当な名前をつけても駄目だ。名は体を現すの言葉の通りその名前に相応しい力がスペルにも表れる。まあ、とりあえず一枚ずつあげるから作ってみるといい。イメージしながら魔力やら靈力を込めればできるから」

白紙のスペルカードを一枚ずつ渡す。さてどんなスペルができるかな？

第十一話 幻想への入り口

「はあ～～」

放課後の教室。教師と二人きり。一人の間に甘い空気などはなく手元には課題。なんで私がこんなこと。

「手が止まってるぞー 長谷川」

このクラスの副担任時取纏静。このクラスでまともな人に入るこの人に苦しめられるとは。

「家に忘れただけで課題追加は酷くないですか？」

「酷いって。ちゃんと言つただろ？ 忘れたらたとえやつてあつたとしても居残りさせりたつて。それに課題がやつてあるなら半分はすぐ解けるだろ？」

「確かにそうですけど…」

課題も半分は終わっている。だけでもう半分となれば話は別だ。あ～こんなことなら無理してホームページ更新するんじゃなかつた。今日の更新は無理かな？

「半分は終わってるみたいだな。課題はしつかりやつたみたいだな。それじゃあもう一枚の方はやらなくていいぞ」

「えつ？ いいんですか？」

やつたこれなら十分更新する時間はある。片づけを始め教室を出ようとする私に奴は、

「いやいや。誰も帰つていいなんて言つてないぞ？」

なんて言つやがつた。

「もう一枚の課題はやらなくていいんですよ?」

「おひ

「帰つちやいけないんですか?」

「ねえ。お前が帰るとこをクラスの誰かが見つけてみる。こんなに早く終わつたら俺の居残りが大したことないって忘れてくる奴が増えるだろ」

確かにそつかもしれないが、

「じゃあ私は何をすればいいんですか?」

「話し相手になつてくれないか?」

そつ言いながら出口「一ヒーを渡してきた。まあ、話すだけならいいか。

と思つていた時期が私にもありました。

「人の家に勝手に侵入する奴。やたらと勝負を仕掛けてくる奴。眞実と嘘を1：9で記事にする奴。所かまわず落とし穴で落とそうとしてくる奴。人の者を勝手に盗つて行く奴。どう思う？長谷川」

延々と愚痴を聞かされてうんざりなんだが…………ものすいぐく共感できます。

「先生も苦労してるんですね」

「ああ。悪い奴らではないんだ。いざという時には頼りになるしな。と、俺ばかり話してばっかだな長谷川は何か言いたい事ないのか？」

この人ならこの街の異常を分かつてくれるかも知れない。

「先生はインターネットとかやります？」

でもやつぱ無理だ。この人にまで嘘吐きと言われたくない。

「はあ」

あの後ネットの話を少しして居残りは終わった。それにしても、
「家に家電が一つもなーいってどうこいつことだよ」

確か十六夜も一緒に住んでるって言つしたな今度聞いてみるか。そ
れにしてもすっかり遅くなつちまつたな。冷蔵庫の中空っぽなの忘
れてたぜ。

「…困りました。…麻帆良に来たまではよかつたのですが肝心の人
が見つかりません。…どうしましょう」

地図の前で着物を着た女子が困つている。はあ。見ちまつたもんは
しじうがないか。

「おい、あんた。誰を探してるんだ？」

「…時取纏静といつ人を探しているんですけどあなたは知つていて
ますか？」

先生。あんたの周りに女子が多い氣がするのは氣のせいかな？

「ああ、知つてゐよ。口で説明し辛い場所だから案内するよ」

「…ありがとうございます。…私は鬼灯桔梗です」

「わたしは長谷川千鶴だ」

送るついでだ。先生の家に家電がないか見せてもらおう。本当だつたら今日書きこむ話のネタにでもさせてもらおう。そう思ひながら森の中の道を歩いていると、

「人の子か悪いが死んでくれ」

ああ、どうやら今日の更新は無理みたいだ。

第十三話／強き鬼と弱き人

「人の子か悪いが死んでくれ」

そう言いながら私の身長ほどのある金棒を振り下ろす化物。ああ、私はここで訳の分からぬモノに殺されるのか。そう思い目を閉じた。

ドガーンッ！！

…………？なんだ案外痛くないものなんだな。死ぬ前つてのは「こんなものなのか？」そう思い目を開けると、

「…逃げてください。…長谷川さん」

金棒を受け止める鬼灯の姿が。

「なんだ。同胞か？なぜ邪魔をする？」

同胞？何を言つてるんだ？この化物は？

「…私は人と共に生きると決めた。…長谷川さんを殺させるわけにはいかない」

鬼灯も化物？

「何を馬鹿なことを。人と鬼が共に生きれるわけなかりつ。強き我らを恐れ、欺き、打ち払ってきた奴らと。見てみる。お前が守ろうとしている人の子も人と違う我らを恐れている！」

ドガツ！！！

鬼灯が吹き飛ばされて木に打ち付けられた。

「…それでも私は人と共に生きたい」

「…そうか。なら楽に逝かせてやる」

鬼が金棒を振り上げる。そうだ、早く逃げないと殺される。

「…人の子よ。なぜ我の邪魔をする」

「…長谷川さん」

今すぐ逃げて部屋に閉じこもりたい位怖いのに、今すぐ逃げないと殺されるのに、どうしてこの体は鬼灯を庇っているんだ？

「人の子よ。そこをどけ」

「い、いやだ」

「なぜ、邪魔をする？お前が庇っているのは我と同じ鬼だぞ？お前たち人が恐れている鬼だぞ」

「わ、わかってるさ。鬼灯がひ、人じゃないことくらい。どかないとわた、私が殺されることぐら」

そうだわかってる。

「ならば、なぜお前は邪魔をする？」

「わた、しは、強くない。鬼灯がし、死んで私がい、生きても。き、きつと一生、こ、後悔する。わ、私はそんなふうに、い、生きていけるほど、強くないんだ。私の心は」

誰かを犠牲にのうのうと生きていけるほど強くないんだ。

「…」

「…」

涙で滲んで目の前の鬼がよく見えない。がちがちと歯がなつて周りの音もよく聞こえない。

「…どうして人は我が見限るつとするたび我の心を揺り動かすのか」

「…」

「なぜだ？幻想郷の長よ」

「先生？」

「決まってるだろう。人も鬼もいろいろな奴らがいるんだ。人だ鬼だといつまでもひとくくりにしてるから互いに理解しづらくなる。機会があれば幻想郷に来い。幻想郷じや種族の違いなど些細な問題だ」

「そうだな。考えておこう」

そう言うと鬼が消えた。

「よく頑張つたな長谷川」

先生の手が私を撫でてくれて力が抜けて誰かに支えられた。

「… ありがとう。長谷川さん」

その言葉を聞き私の意識は落ちた。

第十四話／幻想への一步

「んっ」

目を開けるといつも見ている寮の天井ではない和を感じさせる木の板でできた天井。これはあれか？あの台詞を言つべきなのか？そうだよな。逃げちゃダメだよな。

「知らないで」「起きましたか。長谷川さん」……

少し顔を赤くしながら横を見るとメイドがいた。つーか、十六夜。今までいなかつたよな？

「ついて来て下さい。皆さんお待ちです」

「起きたか、長谷川」

咲夜が消えたかと思つたら長谷川を連れてきた。前々から思つてたが、時間を止めている間咲夜は年をとるのか？

「ああ、それよりなんでエヴァンジエリンと絡繰がいるんだ？」

「長谷川の知りたい事を知つてるからだよ。知りたいだろ？自分と

周りの認識の違いを「

では話そつか。

関係者説明中……

「妖怪に吸血鬼に口ボットしまいには魔法使い。いつの間にうちのクラスは人外魔郷になつたんだ?ああ、私の世界に非常識が満ちる」

話し終えると長谷川は頭を抱えブツブツ言いだした。

「ここの麻帆良では常識に囚われてはいけないのです」

茶々丸それは青い巫女の台詞だ。

「で、どうする?長谷川」

「どうするって何をだよ?」

「今、長谷川には二つの選択肢がある。一つは今知ったことを全て忘れて普通の世界に戻る。もう一つはこのままこっちの世界にもかかわる。前者は普通の生活を送れる代わりに今回の用に巻き込まれ

る可能性がある。後者は危険な世界に踏み込む代わりに自分を守る術が得られる。まあ、どうする？」

そう言いつと考へ始める。今のうちにひらひらの問題もどうにかしないとな。

「鬼灯」

「…はい。…なんでしょう」

幻想郷に住みたいと言つていた鬼の女子。だけど今は幻想郷には入れない。

「結界の調整が済むまでここに住んでもらうけどかまわないか？」

「…はい。…かまいません」

住人が増えるのか。今のところ食費のせいでぎりぎりの生活だし。彼女にも働いてもらうか。

「何か特技はあるか？」

「…特技。…模写とか荷物運びとかが得意です。…私の能力はうつす程度の能力ですので」

ん？ 模写と荷物運び？

「写すと移す？ ちだ？」

「…両方です。…わかりやすく言いつと移し映し写す程度の能力です」

なるほどかなり使えそうな能力だな。いろいろと応用できそうだ。

「先生」

どうやら決まったようだな。

今まで私を苦しめてきたまわりとの認識の違い。その原因は魔法使いが張った認識阻害。今更とやかく言つつもりはないがもう少しましなものにして欲しかつた。そうすれば嘘吐きなんて言われなかつただろう。だけど今はそんなことどうでもいい。私の前には二つの扉がある。現実と幻想の扉。どちらの扉を選んでもきっとこの先生は守ってくれるだろう。私が麻帆良を出て普通の生活をするまで陰ながらに、私が自分を守れる力を得るまで私の前に立つて。前の私なら迷わず現実を選んだだろう。だけど私は知つた。初めて会つた私を命懸けで守ってくれる鬼や無数の生徒の中の一人にここまで親身になつてくれる妖怪。なんにもしてくれなかつた魔法使いは信じられないが、こいつらは信じられる。それに、ただ守られるだけつてのはご免だ。

「わたしに戦う力を教えてくれ」

第十五話～魔法使い～

次の日の放課後。俺と咲夜、ルーニア、長谷川、鬼灯、桜咲、龍宮、雪風はマクダウェルの家に向かっている。

「なあ、なんでヒュアンジエリンの家なんだ？先生の家じゃダメなのか？」

「マクダウェルの方方が何かと都合がいいんだよ」

「そーなのかー」

「はあ～。やっぱルーニアちゃんは可愛いなあ～

「まつたくだ。刹那もこれくらい素直になればいいのだが」

「な、何を馬鹿なことを…」

「みなさんもうすぐ着きますよ」

「…あやこここののは絡繆さんですね」

咲夜がそう言いつと一度マクダウェルの家が見えてきた。扉の前には絡繆が立っている。

「みなさんよつこりました。どうぞマスターがお待ちです」

ガチャツ。

「ケケケケツ！」

バタン。

ゴン。ドチャ。

「入るぞ。マクダウェル」

足元に転がってる人形の頭を掴んで持ち上げながらマクダウェルの家に入る。

「よく来たな。纏うへぶつ！？」

にやにや笑っていたマクダウェルの顔に人形を投げつける。少しすつきりした。

「何をするーー？」

「従者の管理くらいしつかりしろ」

「ケケケ、イイジャネエカ。ヤリアオウゼ」

マクダウェルの頭の上でケタケタ笑ってる人形はチャチャゼロ。マクダウェルの最初の従者で封印が解けたことにより動けるようになつたらしい。

「お前の相手は俺じゃねえよ。とりあえず別荘に行くぞ」

「もう何でもありだな。魔法って」

今私達はエヴァンジェリンの家の地下室にあつたボトルシップ？の
ようなものの中に入つてゐる。なんでもここでの一日は外での一時
間らしい。

「じゃあ本日のメニューを発表する。桜咲、鬼灯の二人はチャチャ
ゼロと接近戦の特訓。ルーミア、雪風、龍宮の三人は弾幕ごっこで
遠距離戦の特訓。長谷川は俺と魔法についての勉強。咲夜は俺のサ
ポート。絡繆とマクダウェルは全体のサポート。それじゃあ始めつ
！」

桜咲、鬼灯、チャチャゼロは下の砂浜へ。ルーミア、雪風、龍宮は
建物の前の広場へ。私と先生と十六夜、絡繆とマクダウェルは教室
のような部屋の中へ。それぞれ向かう。

「では、授業を始める。今回のテーマは幻想郷の魔法といつちの魔
法の違いだ」

「魔法に違ひつてあるのか？」

「あるとこつより全く違つと言つた方がいいか。魔法使いの定義か
ら違つ」

定義つて魔法を使えるから魔法使いじゃないのか？

「いっちの魔法使いの定義は魔法が使えること。幻想郷の魔法使い

の定義は魔法が体の原動力となつていて

「魔法が使えるってのは解るが原動力ってのはなんだ?」

「幻想郷で魔法使いになるにはある魔法の習得が必須だ。その魔法は捨食の魔法。食事を取りなくても魔力で補えるようになる。この魔法を習得した時点で魔法使いという種族になる」

つまり幻想郷の魔法使いつてのは自分の体のつくりを変えてるのか。

「幻想郷の魔法を使うものはこっちの世界にほとんどない。なぜだかわかるか?それはめんどくさいからだ。こっちの世界の魔法は決められた術式に魔力を注ぎ発動させる。いふなれば出来上がった機械に電気を流して動かすようなもの。対して幻想郷の魔法は一からすべて組み上げる。望む結果が出ないことや魔法自体発動しないことがある。しかしそこには無限の可能性がある。ただの魔法使いがたどり着けないような場所に至ることができる」

普遍化された魔法とそうでない魔法。

「こっちの魔法使いはいうなれば軍人。自らの正義を信じ、魔法といふ武力を使い守っていると思い込んでる者たちだ。対して幻想郷の魔法使いは研究者。自分の夢を追い求めただひたすらに魔法というものを追いかけていく」

長くなりそうだからパソコンにまとめとか。そう思いパソコンを起動させると十六夜が驚いたような顔をした。

「どうしたんだ?そんな顔をして」

「長谷川さんは式神を使えるのですか？」

「「はあ？」」

エヴァンジェリンも私と同じように呆けて声を出した。先生を見ると少し考えやがて納得したといつ顔をした。

「幻想郷で言う式神の概念は「パターンを創ることで心を道具に変えるもの」だ。主が決めた方程式通り動くことにより自分の力以上の能力を使うことができる。パソコンも似たようなものだろ？計算式を使い、命令通り使役できる」

似たようなものなのか？まあ、エヴァンジェリンもなるほどとか言つてるしそんなものか。

「十六夜、気になるなら後で教えてやるよ。まあ、先生授業を続けてくれ」

「やうだな、じゃあ次は…」

先生が言う言葉をカタカタとキーボードをたたいてパソコンに打ち込んでいく。それにしても式神か。充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない。十六夜は今の私が使い魔を操る魔法使いにでも見えてるのかね。

第十六話　おてんば氷柱娘

「基本的なことはこれで終わりだな」

そう言うと長谷川が糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

一 セー」と終わったこれで休める

俺はそんなに優しくないぞ。スギやかに魔道書のことをいへりませ

「これとこれとこれ。それにこれも後、後ろに積んである奴も解読してもらう」

「疲れてるせいかもしれないから一応聞くぞ？本棚一つに収まりきらないほど魔道書が積まれてるよう見えるんだが」

うん、長谷川の眼は正常だ。

「ちなんていれ全部読むまでの部屋から出れないからな」

「ああ――――もひこにやー・ぢりてやるよ――私を丑く見るなよ!」

「よくいった。そんな君には「れをあげよ」つ

机の上に錠剤が入った瓶を二つ並べる。

「右が捨虫捨食薬。一時的に魔法使いの体になれる薬だ。肉体の成

長を止め、食事は薬に内包された魔力で補う。一粒の有効期間は一年だ。左が胡蝶夢丸。楽しい夢が見られる薬だ寝る間に飲むといい

「ちょっと待て。薬の内容から察して私は最低でも一年ほどここから出られないよ」と思つんだが…」

「これ以外にも魔道書はあるからな。大丈夫だ。咲夜と俺でこの部屋の時間を限りなく遅くしてある。時間を気にせず存分に読め！」

「…………はあ。もう何言つても無駄だな。わかつたよ。おとなしく呼んでるから他の連中のどこに行つてくれ」

そう言つと薬を飲み魔道書を読み始める。

「じゃあ、マクダウホール、絡繆、後は頼む」

部屋に残つている一人に声をかけ部屋から出てこぐ。そして、ルーミアの方に行つてみるか。

「嫉妬」刺し貫く私の想い」「

「夜符」「ナイトバード」「

空で巨大な氷柱と光弾が交差する。パワータイプのスペルカードか。

「なかなかいい出来だな」

「勉強はもう終わったのかい？」

銃を磨きながら龍宮が聞いてきた。

「基本的なことはな。それにしても「刺し貫く私の想い」か。つらら女にぴったりだな」

「つらら女？」

龍宮が首を傾げる。

「聞いてないのか？彼女はつらら女と人間のハーフだよ。つらら女は雪女みたいなもんだ。つらら女の伝承の結末は大きく分けて二つ。一つは結婚した男に風呂に入るように言われそのまま風呂で溶けてしまう。もう一つは春になつてつらら女が消えた後、結婚した男は逃げられたと思い悲しみ、その悲しみを埋めるために新たな妻を娶る。冬になつて戻つて来たつらら女は怒りのあまり自信を氷柱に変えて男を刺し殺す」

「だから「刺し貫く私の想い」か。私も早く作らないとなあ

そう言いながら白紙のスペルカードを眺める龍宮。

「先生のスペルを参考までに見せてもらえないかい？」

俺のスペルか。

「知り合いのスペルをアレンジしたのだが…」

カードを出し宣言する。

「浮氣「移り気なマスタースパーク」

背後にランダムに並んだ魔方陣からいくつものマスタースパークが放たれる。

「誰かのスペルをパクるのも一つの手だぜ」

「そーなのかー」

後ろを見るといつの間にか弾幕ごっこを終えた一人が立っていた。表情を見る限りルーミアが勝ったようだ。

「時取さんー私のスペルはどうでしたか?」

「よかったです。だけ少しスペルに頼り過ぎだな。通常弾幕と合わせて使わないと、力押しだけじゃ勝てないよ」

「わかりました!ルーミアちゃんもう一回行くよ

「わはー」

そう言い一人はまた弾幕ごっこを始めた。

次は桜咲の方に行つてみるか。

ルーミアちゃんの光弾を紙一重で避けながら氷柱を放つ。ルーミアちゃんが手から放つ氷柱を避けている隙に氷翼から氷柱を上空に向けて放つ。これで下準備はできた。

「行くよルーミアちゃん！ 嫉妬『刺し貫く私の想い』」

巨大な氷柱を作り出し私の周りにいくつも待機させる。ルーミアちゃんは動かずじっとわたしを見ている。だけどまだ撃たない。…………まだ……まだ……まだ……今！

「いけつー！」

巨大な氷柱が飛んでいくと同時にわざと空中に撃つた氷柱が落ちてくる。捕らえた！

「下が開いてるよー！」

やつぱりとルーミアちゃんが下に向かつてものすごい勢いで飛んでいく。掛かりましたね。もう一枚スペルを作ったんですよー！

「氷荀「空を穿つ氷柱」」

地面から空に向かつていくつもの氷柱が伸びる。

「わわわっ！？」

ルーニアちゃんが止まれず氷荀に向かつて突っ込み、上から落ちて来た氷柱に磔にされる。

「聖者は磔にされました？」

「まさかもう一枚スペルを作つてたとは。負けた～」

「ふつふ～ん。初勝利！！！さあ、ルーニアちゃんもつとやねよ～～～」

「手加減してたとは言え負けるなんて…。いいわ。幻想郷の弾幕を見せてあげる」

「ちょっとー！？多い！多い！多い！…いきなりスペルなんて
…え？スペルじゃないの？Lunatic？何それ！？あつ！ダメ
！当たるー当たるー！あつ」ピチュー。

第十六話「おてんば氷柱娘」（後書き）

スペルカード説明

嫉妬「刺し貫く私の想い」

つらら女の伝承を基に作ったスペル。巨大な氷柱をいくつも放つパワータイプ。

浮氣「移り気なマスタースパーク」

魔理沙のマスタースパークをアレンジしたもの。かなり魔力を消費するので魔理沙は使えない。

氷荀「空を穿つ氷柱」

洞窟に発生する逆さの氷柱（氷荀）をイメージして作ったスペル。いくつもの氷荀を地面から生やすが弾幕（こ）はほぼ空中戦なのであんまり使えない。

お知らせ

オリジナルのスペルを隨時募集します。基本的にスペルカードを使うのは時取纏静、ルーミア、十六夜咲夜、雪風氷花、鬼灯桔梗、長谷川千雨、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、桜咲刹那、龍宮真名の九人です。これから増えるかもしれません。

スペルのイメージとしては、

時取纏静

妖怪の伝承を再現したスペル。または伝統など受け継ぐことに関するスペル。

ルーミア

闇に関するスペル。

十六夜咲夜

時に関するスペル。

雪風氷花

氷柱や氷に関するスペル。

鬼灯桔梗

鬼や能力に関するスペル。

長谷川千雨

未定。（どんな魔法を使って欲しいか書いてもらえるとうれしいです。）

エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル

氷と闇と吸血鬼に関するスペル。

桜咲刹那

剣と翼に関するスペル。

龍宮真名

狙撃や飛び道具に関するスペル。

というモノを考えています。

作者がいいと思ったものはどんどん出していきたいと思います。ではたくさんのお意見お待ちしております。

第十七話 美しき鬼面仏心

「斬岩剣！！」

「ケケケケケケ！モツト、モツト！モツト早クダー！ソンナスピー
ドジャ俺ヲ捕エラレナイゼエー！」

卷之二

生き生きしてるなチャチャゼロ。 桜咲涙目だぞ。 それより鬼灯は……
いたいた。

「調子はどうだ。鬼灯上

「…時取さん。…なかなかうまく手加減ができません」

セーとその金棒 素振りしてみてくれるか?」

…」
わかれました

ぶおおん！

「ウオツ！？」

「さういふ？」

ひゅ～～～～～～～～
どばん！！

「…これでも手加減してるんですけど」

手加減した素振りで人が空を飛ぶか…萃香たちより力あるんじゃないのか?まあいいか枷を一応作つておいてよかつた。

「ほら、これを両手両足につける」

「…//サンガ…ですか?」

「ああ、ミサンガ型の枷だ。普通なら一つで十分だが鬼灯は人一倍、いや鬼一倍力があるようだからな」

少し模様を見てから四肢につける鬼灯。

「力をコントロールできるようになったら千切れるようになってるからそれをつけて生活するといい」

「…ありがとうございます!」

「いきなり吹き飛ばすってどうこいつですか!…?」

やつと戻つて来たか。とりあえず。

「咲夜、着替えを」

「わかりました」

咲夜が桜咲と共に消えて少ししたら戻つて來たが。

「なぜにメイド服?」

「茶々丸さんのお姉さんに借りました」

そう言えば確かにメイドロボがたくさんいたなあ。

「なんで私がこのような格好を…」

「とりあえず桜咲と鬼灯で模擬戦してみてくれ

さて鬼の力なしでどこまで戦えるか。

「行きますー！」

桜咲さんがまっすぐこちらに向かってくる。普通の鬼なら正面からぶつかるところですが私は普通の鬼ではないので。

「…ふつー！」

「なつー？」

刀の軌道を外に移しつつ背後に回り背中を押す。空中で体制を整えてますが遅いです。金棒で地面を叩きその衝撃を桜咲さんの真下に

移し炸裂させる。

「くはっーー?」

うまくいったようですが飛び散った砂でよく見えませんね。晴れるまで待ちますか。…と思つたら斬撃が飛んできました。半身になつて避けます。

「はあああーー百烈桜華斬ーーーー」

「…百列桜華斬」

桜咲さんの技を[写]し取り技を相殺する。

「何!?」

「…王手です」

驚いてる隙に近づき金棒を突き付ける。

「今のは神鳴流の技、どうして鬼灯さんが?」

「…[写]すには模倣するという意味もあるんですよ」

やはりいいですね人並みの力は必要以上に傷つけずに済みます。ですが、金棒は少し重いですね。代わりの武器を考えませんと。…その前に。

「ケケケケケケケケ」

チャチャゼロさんの相手をしないといけないようつです。

第十八話 奇才の魔法使い見習い

パタン。

「やつと、終わった

最後の魔道書の写しを読み終え机に突つ伏す。

「お疲れ様です。長谷川さん」

茶々丸が毛布を持つてきながらそう呟く。

「ありがとうございます」と寝るから近づかないで。

胡蝶夢丸を一口飲み横になる。おやすみ。

「久しぶりの外だな」

咲夜に入れてもらつた紅茶を飲んでると長谷川が出てきた。俺達からするとまだ数時間しか経つてないけどな。

「お疲れどれくらいかかった?」

「さあな。十年過ぎたあたりから数えてねえ」

「五十年。正確にいえば五十四年と三カ月と十三日です」

長谷川の言葉に絡繆が答える。その後ろからマクダウェルが魔道書を読みながら歩いて来ている。

「意外と速かつたな。百年ぐらいはかかると思つてたのに。才能あるんじゃないか？」

「才能ね。どうせなら普通の生活で役に立つものが欲しかったよ」

そう言いながら咲夜が入れた紅茶を飲む長谷川。うん。薬のおかげで魔力量も増えてるみたいだな。

「それじゃ、次のステップに移るか」

そう言つと明らかに嫌な顔をした。

「そんな顔をするなよ。片手間にできることだから」

紅茶を飲みながら手の上に光弾を作り出す。

「やつてもうひとつは魔力のコントロールだ」

手の上の光弾を適当に飛ばす。

「なんだそんなことか」

長谷川が手のひらから光弾を出し自分の周りを回らせている。うん、どうしたこと?……説明を求め絡繆とマクダウェルを見る。

「魔術書に書いてあつた魔力のコントロールをマスターに聞きながら試していました」

「とりあえず「ツを教えておいたりペン回し的な感覚で魔術書を読みながらやってたぞ」

…………卒業したら幻想郷に呼ぼうかな。かなりの魔法使いになれそうな気がする。俺でも魔力をここまで操れるようになるのに十年かかったぞ。

「…もう俺が教えることないんじゃないか？」

「そんなことはないだろ。そんなことより私は使役や召喚の魔法を使つていいと思つんだがどう思つ?」

「いいんじゃないか?そつなると使役する奴らが必要だな」

まずは妖精や妖獸あたりから始めるか。そうなるとどうやって探すかが問題だなこっちには妖精も妖獸もあんまりいないし、いつそのこと一から作るか。

「マクダウエル。此処みたいな魔法球まだあるか?」

「うん?昔ために作ったものがあるが中は更地だぞ?」

「それでいいからくれ」

「それなりの対価は「今読んでる魔道書は誰のだ?」…わかつたよ。

茶々丸」

「はい、マスター」

しばらくすると茶々丸が魔法球を持ってきた。中に入つて、それじゃ早速始めるか。

主人公栽培中…

うんとりあえずこれくらいでいいか。あとは時間を進めておいてその間に動物を捕まえに行くか。

主人公捕獲中…

結構集まつたな。後は魔法球の中に放して準備完了。

「後はしばらく放つて置けばいいだろ？

「何してたんだ？」

魔法球から出ると長谷川がパソコンをいじりながら聞いてくる。

「幻想郷で育つた植物の種や苗を植えて少し育てた後適当に動物を

捕まえて放つておいた。しばらくすれば妖精も出てくるだらう、力を持つた動物は妖獣になるだらう」

「ふーん

その後それぞれ修業をして一日たつたので外に出る。雪風、龍宮、桜咲は寮に戻り長谷川は「うちでもう少し幻想郷の魔法について勉強することになった。

家の前に着くと中から声がする。なんかすごい嫌な予感がする。家に入ると中では、

「むほほほほほー」

下着（ルーミア、咲夜、鬼灯の物）を山ほど持ったオゴジョが走り回り、「ちょっとー!? 待ちなさいエロガモー!」

そのオゴジョを捕まえようと神楽坂が走り回り、

「カモ君こことしちゃダメだよー!」

なぜか下着（ルーミアの物）を一枚握りしめながらオゴジョを追う

「あのオーフジヨは食べてもいいオーフジヨ？」

「ああ。今日の晩御飯はオーフジヨ鍋だな」

「腕によつをかけて作りましょ」

「少し私にも分けてくれ試したい術式が……」

第十九話／本能に忠実な淫獣

纏静たちが修業を始める一時間前。

『ネギ君を鍛えてくれんかの？』

『気が向いたらな』

まあ、ネギ君が直接言えれば受けてくれるじゃん。

「しづなくん。放課後ここへ来るよつてネギ君に伝えておいてくれるかの？」

「わかりました。学園長」

一応エヴァにも頼んでおいたかの？

「で、兄貴ども行くんですかい？」

ネギの肩に乗っているオーデジヨ、カモベール・アルベールが尋ねる。

「副担任の時取先生の家だよ。カモ君。学園長が言うに『はとても強いらしいんだ。だから修業をつけてくれるよう頼みにね』

「時取先生がね～。となると一緒に住んでるルーニアちゃんも咲夜さんも関係者つていうこと?」

明日菜がネギの隣を歩きながら自分の考えを呟く。

「あの美少女一人と住んでいるですかい！？なんて羨ま～…けしからん野郎ですぜー！」

「本音が漏れてるわよ、ヒロオコジヨ」

「あ、いいですね」

目の前には純和風のお屋敷が立っている。ほとんどが西洋風の建物の麻帆良では珍しい家だ。

コンコン。

「時取先生。ネギです」

シーン…。

「おかしいな。僕より先に帰つてゐるはずなのに…あ、開いてる。お邪魔しますよ～時取先生」

「ちゅうとうつ～!? ネギ！」

明日菜の言葉をスルーしながら中に入るネギ。

「時取先生～。いませんか～？……いないみたいですね」

「パンツ～！」

「勝手に入っちゃダメでしょ～。」

「す、すこません」

ネギに拳骨を落とす明日菜。

「や、出直すわよ」

ネギの首根っこを齒んで玄関に向かうがある」としゃべる明日菜。

「ネギ。… Hロガモは？」

「あ…」

「むほ――――」

その時奥から聞こえる奇声。

「あのHロホ「ジヨつ…」わざと捕まえるわよ～。」

「ハ、ハイ～」

「見てください冗貴！パンツのほかにドロワーズもありますぜ～。」

「見せてください冗貴！パンツのほかにドロワーズもありますぜ～。」

「うーーー！」

「へへっ……甘いっすよ姉さん。そんなスピードじゃ俺たちを捕まえられねえぜー！」

逃げるオゴジヨ、追いかけるアスナとネギ。

「待ちなさいっー！」

「うーーで捕まるわけにはいかねえっ！喰らえっ！パンツ弾幕ーーー！」

「ちょっと人のパンツでなにしてるのよー！」

「あわあわあわ

「世界中のパンツは俺たちのものだ！」

無数に投げられた下着を華麗に避けて追いかける明日菜と顔に当たった大人っぽい黒い下着を持って顔を赤くしているネギ。

「むほほほほほー！」

「ちよつといー!? 待ちなさいエロガモー！」

「カモ君ことしなことしあやダメだよーーー！」

「あのオゴジヨは食べてもいいオゴジヨ?」

「ああ。今日の晩御飯はオゴジヨ鍋だな」

「腕によりをかけて作りましょ」

「少し私にも分けてくれ試したい術式が…」

「…漬していいですか?」

逃げ回るオゴジヨの前に立ちはだかる五人。

「何人いようと俺つちは止められないぜ!」

オゴジヨが五人の隙間を走り抜けようとした時。

「咲夜

「はい」

いつの間にか捕まつたオゴジヨ。

「あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ!『俺つちは奴らの間を駆

け抜けたと思つたらメイドに捕まつていた』な、何を言つてゐるのかわからぬーと思うが俺つちも何をされたのかわからなかつた…頭がどうにかなりそうだつた…催眠術とか超スピードとかそんなチヤチなもんじやあ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を味わつたぜ…』

「まぢは皮を剥いで…」

ナイフを取り出しつゝ調理手順を確認してゐるメイドさん。

「セレの兄さん何とかなりませんか?」

「ムリダナ(・×・)」

その日麻帆良の森に甲高い悲鳴が響いた。

第一十話～ストレスとたらこ回しと懲罰～

アーマルセラピーと「うものを」存じだらうか？アーマルは動物、セラピーは治療または療法という意味だ。つまり動物と触れ合ひことで精神を安定させる療法。もつと簡単にいえば動物と触れ合ひことで癒されストレスを和らげ、共に暮らすことで規則正しい生活を送れるということだ。なぜ俺がこんなことを言つてゐるのかということはストレスがやばいからだ。ただでさえ自称正義の魔法使いやスキマのせいで胃薬常備の状態の所に今回の事件だ。獣成分が来たと思つたら変態だとは…。あ～幻想郷にいたころが懐かしい。あそこにも同じくらいストレスはあったが代わりに癒しがあった。藍や桜の尻尾。橙や鈴仙、てゐの耳。永遠亭にいるたくさんの鬼。何が言つたいのかとこうと……

モフモフしたい！！

あの尻尾を！あの耳を！あの体を！ふさふさの毛による最高の手触り。抱きしめたときに感じる体温の心地よさ。藍や橙がいたからスキマの無茶ぶりにも耐えられた。桜がいたからパパラッチのしつこい取材にも耐えられた。てゐのいたずらもてゐの耳があつたから許せた。鈴仙と永遠亭の鬼たちがいたから永琳の実験にも耐えられた。

なのに今回来たオコジョはなんだ！害悪以外の何物でもないじゃないか！

まあそんな話は置いといて、

「俺に修業をつけて欲しいと？」

「はーー。」

「あなたも苦労しちゃんのね」

ネギ姫は元気良く返事をし、神楽坂は俺の話を聞いて同情してくれてこむ。それにしても修行ねえ。

「めんどくさい」

「ええーー?」

「ですよね~」

「畠口菜さんまでーー?」

神楽坂が同意してくれた。成績を少し上げ解いてやろう。

「おい、てめえーーーなんで冗貴に修業をつけてくれないんでしょ
うか? はい、すいません。自分ちょーしきました」

「俺は魔法使いじゃないからな。魔法使いとして強くなりたいなら
ここへ行け。間違いなく超一流の魔法使いがいるから」

そつとニヒルアの家への地図を描く。ネギたちはそれを受け取ると
そのまま勢いで飛び出していく。

「もうやだ。何してくれちゃってんのあのねらりひょんば。ただで
さえ監視の田があるのにあいつが来たらもつとひどくなるじやん。
そんなに強くしたいなら自分で育てればいいじゃん。どうせ学園長
室に引きこもってるだけだろ? オンラインゲームみたいに寝る間も

「ネギ先生ってそんなに優秀なのか?」

「才能だけなら超一流だよ。英雄の息子だしな。魔力の扱いを見るにその才能も生かしきれてないようだがな。今なら長谷川でも勝てるぞ。弾幕で撃乱、罠を作成、誘導。その後は「先生……」あなたがツ、泣くまで、殴るのをやめないツ！」と言いながら殴るもよし「戦争を、しましょう」と無数の文房具を取り出すのもよし「私の戦闘力は530000です」片手で戦うのもよし。ああどれでいく？」

個人的には一番目をやつてもらいたい。一番目も捨てがたいが。

「なんだ私に戦わせる気なのか？」

「つけてお手に置いてください」とか言つてきたらな」

めんじゅくじ。

「ああ、そういえば勉強しに来たんだつたな。さあ、何でも聞け」

「大したことじやないんだけど、妖精や妖獸を従えることになつた
ろ。従える「ツ」とかわ無いのか？魔法で縛るだけじやうまく操れな

いだろ？」

「妖精の方は簡単だ。ちつちやい子の興味のあることで興味を引けばいい。基本的に頭はよくないしな。妖獣の方は知能がいいやつは話し合いで力が強いやつは戦つて上下関係を教えればいいかな。妖精のことについてもっと知りたいなら咲夜に聞けばいい。確か妖精をメイドとして雇つてたから」

「なら明日聞くかな料理の邪魔しちゃ悪いし、それじゃまた明日」

「ああ、また明日」

その頃エヴァ宅

「兄貴ー！こいつ元賞金首、闇の福音ですぜー！」

「ええー？」

「うぬせこそ貴様らー私の家に不法侵入しておいて何を騒いでるー！」

「うぬせこそ貴様らー私の家に不法侵入しておいて何を騒いでるー！」

！」

「マスター、私が招き入れたので不法侵入にはなりません」

幻想郷の景色（博麗神社）

幻想郷の東の端にある博麗神社。外の世界との境界に立つており幻想郷で最も重要な建物。今回はそんな神社の一日を見てみよう。

『妖怪の賢者すさんな管理に信用がた落ち』

ある春の日幻想郷に戦慄が走った。

なんと、この幻想郷を守っている一つの結界が一時的に消滅の危機に陥ったという情報が入ったのだ。

情報確認のために普段結界の管理をしている妖怪ハ雲藍に話を聞きに行くとそこにいたのはどこに付しているハ雲藍だった。

医者の八意永琳さんの話によると過労らしい。九尾の狐である彼女が過労なんかで倒れるだろうか？そのことを八意さんに聞いてみると「九尾の狐だからこそ過労で済んでいるのよ。普通の人間や低級の妖怪ならここまで来る前に天に召されるわよ」とか。

今回の事件の原因は妖怪の賢者ハ雲紫が結界の管理を怠つたことにあら。いくら優秀な式神でも一つの世界を維持するに等しい仕事を一人に全部任せても限界が来るのは自明の理である。

これを機に八雲紫のことを調べてみた。

- ・一日平均十一時間睡眠（冬眠あり）
- ・能力による不法侵入
- ・特にこれといった仕事をしていない

などなどなぜ彼女が重要な立場にいるのか疑問を覚える。

現在八雲紫は閻魔さまの監視のもと結界の修復に勤しんでいる。また修復するにあたって幻想郷は一時的に外と完全に隔離される。この影響で時取纏静、ルーミア、十六夜咲夜の三名が外の世界に残された。一刻も早く修復して欲しいものである。

少しばかり内容は古いが文々。新聞初真実100%の新聞を横に置きお茶を飲む腋巫女こと博麗靈夢。彼女は博麗神社に住む異変解決の専門家である博麗の巫女である。異変解決の専門家であるため普段は仕事がない。

「平和ね…」

「相変わらずのんびりしてるな。靈夢」

のんびりしているところに来たのは霧雨魔理沙。黒いとんがり帽に黒いドレス、白いエプロンといかにも魔法使いですという見た目の少女だ。

「また来たの？」

彼女は暇さえあればこの神社にやつてくる。

「今日は聞いたい事があるんだぜ。パチュリーに聞いたんだが幻想郷が完全に隔離されたって本当か?」

その「」と「」はお茶と共に横に置いてあった新聞を魔理沙に渡す。

もう「」と魔理沙はお茶を飲みながら新聞を読む。新聞を読み進める「」と「」の顔は曇つてくる。

「つまり、しばらく纏静と弾幕」」ができないってわけか

「ウチの参拝客が減るつ」

「すまないな。紫やまのせ」

神社の中から出てきたのは九本の尻尾を揺らしながらお茶請けのお菓子を持ってきたハ雲藍。

「おひ。ここにあいつの式神をやめたのか?」

「結界の調整が済むまで休暇としてここにじめりへ厄介になら」
になつたんだ

「こつのこと魔理沙の言つとおりに式神やめたら、つむなら大歓迎よ? 纏静も従者が欲しいってほやいてたし」

「あれでも私の主人だ。そう簡単に鞍替えするつもつはないよ」

「ほんといい従者よね。なんで纏静にはできないのかしら？」

「全部一人でできるからだぜ。家事も仕事も完璧だろ？」

「できるからって全部やる必要はないでしょ」

彼女は本来神に使えるべき巫女なのだが自分はやうつむかしない。

「平和ね……」

「平和だぜ……」

「平和だな……」

いつもして博麗神社の日々は過ぎていく。

「纏静」。藍」。靈夢」。誰か手伝つて」

第一十一話／井の中の蛙

「行きます！ラス・テル・マ・スキル……」

目の前には呪文詠唱を始めるネギ君。

「さあ、お前の力を見せてみろ！」

偉そうに命令してくるマクダウェル。

どうしてこうなった！？

数時間前のエヴァ

ぼーやの修行を始める前に実力を見ておくか。

ついでに纏静に相手をさせて奴の実力の一端でも見せてもらうか。

よし。茶々丸連れてこい。

数時間前の俺

よし。仕事も終わつたしダラダラするか。

咲夜。お茶を入れてくれ。

茶々丸。どうしたんだ？ぐふつ！？

いつの間にか別荘。（いまここ）

「まあ、現実逃避はこれくらいにしてさつと終わらせるか」

「魔法の射手！…連弾・光の9矢！…」

光ね。残念だけど俺には効かないな。手をかざし当たる寸前で屈折させる。（光を屈折させる程度の能力）

「なつ！？これならどうだ！…ラス・テル・マ・スキル・マギスティル！…風の精霊17人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！…」

今度は風か。風ならある程度操れるな。（風を操る程度の能力）自分の技に捕まりな。

「くつーっ！どうやつて僕の魔法を…？」

自分の魔法に捕まってるネギ君。

「教えるわけないだろ。ほりつ。待つてやるから早く抜け出せ」

一分後。

「こうなつたら僕の全力を出します！…ラス・テル・マ・スキル・マギスティル！…来れ雷精！…風の精！…雷を纏いて吹きすさべ南洋

の嵐！－雷の暴風！－

うん。なかなかの技だが……。

「パワーが足りないな。魔砲『マスタースパーク』

マスター・スパークが雷の暴風を突き破りネギが海へと落ちる。

「2時間前に出直してきな」

ネギ視点

「魔法の射手！－連弾・光の9矢！－」

九つの光の矢が時取先生に向かう。その光の矢は時取先生が手をかざしただけでそれる。

「なつ！？（光の矢がだめなら風の矢で動きを止めた後に大きいのを）これならどうだ！－ラス・テル・マ・スキル・マギステル！－風の精霊17人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！－」

時取先生に向かつた風の矢は中程で方向を変え僕に向かつってきた。

「（避けられない！）くつ！？どうやって僕の魔法を…？」

「教えるわけないだろ。ほらっ。待つてやるから早く抜け出せ」

完全に舐められているこのなつたら全力をぶつけるしかない。

「いじなつたら僕の全力を出します！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来れ雷精！！風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！雷の暴風！！」

これが今の僕の全力！

「パワーが足りないな。魔砲『マスタースパーク』

無情にも僕の魔法はあっけなく魔砲に呑み込まれた。

「2時間前に出直してきな」

「私の台詞…」

「で、こんな感じでいいのか？」

「ああ、ああいうタイプは一度圧倒的な敗北に合わせたほうが強くなる」

咲夜が入れた紅茶を飲みながらダラダラする。咲夜がな何か言つてゐる気がするが気にならない。

「そう言えば。どうやってほーやの魔法を操ったんだ？魔力を感じられなかつたが」

「さう聞いて返り討ちになつた魔法使いはトロウムの崩壊系列の数より多いが。知りたきや力ずくで聞いてみる」

「私の台詞……」

「いや、やめておいつ。開放状態でもお前に勝てる気がしない」

「じゃあ、俺は寝る。咲夜なんかあつたら起しちゃくれ」

「わかりました」

その頃のネギ

「僕の魔法がいつもあつせい。フフフフフフフフフフフフ、…………死

の「フ」

「あここここここーっ！」

第一十一話 奇才VS天才

「今のお前はただの魔力タンクだ。膨大な魔力を使いこなすのにお前は圧倒的に経験が足りない。よつてぼーやにはこれから纏静と戦い続けてもらひ」

初耳ですか？

「なんで俺がそんなめんどくさいことを」

「経験を積ませるのに弾幕『』は最適だろ？ 死ぬことはないからな」

だとしてもめんどくさい。いつごとに咲夜……がいなくなるとお茶が飲めない。ルームア……は寝てる。どうしていつごとに限つてあいつは。

「やつぱりここにいたか。先生、聞きたい事が……」

よく来た！

「ネギ君に勝つたら教えてやる！」

「せめて何かくらこ聞けよ」

「わざわざ俺はだらだらしたいんだ。

「はあ。やればいいんだろやれば。制限は？」

「特にない。殺さない程度に遊んでやれ

俺の代わりにマクダウェルが答える。

「ねえ、千雨ちゃんって強いの?..」

寝ようとしたところに神楽坂が聞いてくる。…………いたのか。

「まだまだ修行中だがネギ君より強いぞ

「ふ~ん」

そろそろ始まるな。

「行きますー！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！—風の精霊！
7人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！—」

17本の風の矢が私に向かってくる。ある程度操れるようだけどこのぐらいならいけるか。そう考えると向かってくる夜に向かって駆け出す。

「なー?」

グレイズ。弾幕ごっこでは必須技能らしい。まあ簡単にいえば紙一重でかわすということだ。先生のイージーよりも遅く少ないこの程

度でなら私もできる。

「くつ！ラス・テル・マ・sブツ！？」

詠唱を始めたネギ先生の顔に光弾を当ててカードを取り出す。

「友符「美しき鬼面仏心」」

目の前に桔梗が現れ金棒を構える。

「…しつかり防御してください」

「…？風花！風障壁…！」

「ゴッ！」

桔梗が金棒を振りネギ先生が吹き飛ばされる。その後桔梗は私に笑いかけ消える。

「「」苦労さま。…悪いねネギ先生私の勝ちだ」

どほん！！

まあ、死んではないだろ。

第一十一話／奇才VS天才／（後書き）

スペルカード説明

友符「美しき鬼面仏心」

鬼灯桔梗を召喚する。召喚するといつても本人ではなく分身。

第一二三話／遠隔通信端末

海から引き揚げられたネギ君はまた落ち込みだしたがマクダウェルが何かを言つと急に元気になつた。

「何、京都に父親が残した別荘があると教えてやつただけだ」

京都か、そう言えばもうすぐ修学旅行だしアレを買っておくか。
……長谷川はどうしたかつて？以前作った『箱庭』にいるよ。妖精や妖獸と契約中。まあ、上級妖怪くらいなら逃げられる実力がありし大丈夫だろ。

田曜日。

「ケータイを買いに行きます」

時取家には現在、俺、ルーミア、咲夜、桔梗、長谷川の計五人いるが。

「…………ケータイ？」

「つて一人も知らねーのかよ！？」

三人仲良く首を傾げ長谷川が突っ込みを入れる。

「正式名称、携帯電話。名前の通り持ち運びできる電話だ。まあ、遠くにいる人と会話ができる道具とでも思つておけ」

「そーなのかー」

幻想郷に電話はないからな知らなくとも無理はない。

「ど、書つこいで早速出かけるぞ。40秒でしたくしな！長谷川。
案内は頼む」

「ど、書つこいでケータイを買いに来ました」

「わーー」

料金プランなどは長谷川に任せたおいて俺達はケータイを見ておく。

十分ほどすると全員決まつたらしく俺の所に集まつてくる。

俺のはホトトギスの羽の色のような黒褐色。

ルーミアのは一見すると黒に見えるが夜のように深い青色。

咲夜のはいつも持つてる銀時計と同じ銀色。

桔梗のは鬼灯のような赤色。

機種は全員一緒に最新版のひとつ前の機種でそろつた。

その後、長谷川から通話やメールなどの使い方を教わり家に帰つた。

『夕飯ができました。』

『そーなのかー。』

『…』『夕飯ができたそうです。』

「うれしいからってメールで話すなよ」

幻想郷の景色～寺子屋～

幻想郷の人里にある寺子屋。人間と白沢との半人半獣である上白沢慧音が教鞭を執る幻想郷唯一の学習施設である。今回はそんな寺子屋の一日を見てみよう。

「それじゃあ今日の授業はこれで終わりだ。将太に隼人。明日は宿題を忘れるなよ」

資料をまとめ、口から白いものに出している一人に注意をして教室から出る。

「先生さよならー！」

「ああ、さよなら。気をつけて帰るんだぞ」

「はーい！」

「ふう。まつたく元気なものだな…」

窓の外で手を振る生徒に手を振り返し寺子屋の居住スペースへに向かう。

「ルーミアはしつかりやつてこらだらうか？」

「邪魔してると」

せんべいをかじりながら新聞を読んでいるのは藤原妹紅。私の親友だ。勝手に入っているのはいつものことなので何も言わない。

「何を読んでいるんだ？」

「妖怪の賢者の不祥事について」

授業で使った資料を片づけ妹紅の向かいに座る。

「何か気になることでもあるのか？」

「つもらひつい、と妹紅が持ってきたであらわせんべいをかじる。

「纏静は別にいいとして後の一人はどうしてるのか気になつてな

「ルーミアと咲夜なら外の学校、寺子屋と似たような場所に通つり
しい」

「なんで慧音が知ってるんだ？」

「一応纏静が外にいつてる間はルーミアの保護者だからな」

それにしてもルーミアは無事だろうか。何でも外の学校ではいじめ
が横行してるらしいじゃないか。ルーミアがいじめられたらどうし
よう。あの子は純粋なんだいじめなんて受けたら心に傷を…。

「ま、纏静もいるし大丈夫だろ。眉間に皺よつてるぞ」

妹紅に眉間をつつかれ自分が考え込んでしまつっていたことに気付く。

「それもそうだな」

「それじゃあそろそろ帰るよ。授業の準備もあるだろうしな」

そう言い玄関へ向かう妹紅。

「ありがとう。妹紅」

振り返らず手だけを振る妹紅の姿を見てから明日の授業の準備を始
める。

「つねわー？」

「どうした妹紅？」

玄関から聞こえた声に振り返るがそこには誰もいない。

「妹紅？」

繰り返し呼ぶ声は寺子屋に空しく響いた。

「あれ？今結界が揺らいだような？」

「あなたが最強の妖怪退治屋ですか？」

「いつたいいつの話をしてるんだ。とっくの昔に廃業して今は焼鳥屋だよ」

第一十四話「不幸」

「お願いします！修学旅行の間お嬢様を守ってください……」

俺とマクダウェルに土下座して頬みこむ桜咲。その顔を見ればどれだけ必死か、どれほど近衛が大事かは明らかだ。だから俺とマクダウェルは顔をあげさせ答える。

「だが、断る」

「な、なぜですか！？」

桜咲が慌てて理由を聞いてくる。

「なぜもなにも必要ないだろう。近衛と同じ班だろう？隣でずっと守つてやればいいじゃないか。それが護衛の仕事だろ」

「それは…」

俯く桜咲。

「それとも何か？護衛を俺達に任せて自分は修学旅行を楽しむつも
りか？」

「そんなわけありません！…！」

立ち上がり怒鳴りながら自分の心の内を話し始める。

「あなた達にわかりますか！？禁忌とされ村人全員から嫌悪の目を
向けられる恐ろしさが！あなたに達にわかりますか！？大切な人が
目の前から消えるかもしれない恐ろしさが！あなた達にわかります
か！？守りたい人を守れない悔しさが！…」の胸の痛みがあなた
達にわかるんですか！…！」

涙を流す桜咲の目を見返し言い返す。

「お前はわかるか？生きているだけで周りの者が死んでいく怖さが、
妹を守るために495年間妹を閉じ込めた姉の悔しさが。かつて共
に暮らした者たちに裏切られる悲しさが。友たちを残して逃げてき
たことに対する後悔が。愛する者に裏切られる怒りが。永遠を生き
る孤独が。不幸なのが自分だけと思つなよ」

「けど…！」

「自分の弱さを他人に背負わせるな。近衛を守りたいなら近衛の隣
にいる。近衛に嫌われるのが怖いなら近衛を信じろ。近衛と共に生

きたいなら自分の気持ちに嘘をつくな。安心しろ。近衛はこの程度のことで人を嫌う弱いやつじゃないよ。それはお前が一番わかつているだろ？」「

「…失礼します」

そう言い出でいく桜咲。

部屋に戻り着替えもせずにベッドに倒れ込む。

「断られたのかい、刹那」

「ああ」

「で、どうするんだ？」

「ちょっと考えさせてくれ」

目を閉じる。

「…わかっていないんだ」

第一十五話　京都へ行こう

「起つきあひ～！」

ドスツ！

「がはつ！？」

慌てて起きると腹の上には満面の笑みのルーニア。時計を見てみると零時一分。

「こんな時間に何の用だ？」

「今日は修学旅行だから早く準備するの！」

準備なら昨日済ませただろと言しながらもう少し寝ようと布団をかぶらうとしたら布団が消えた。

「咲夜お前もか

仕方なく起きて朝食という名の夜食を食べ、荷物の確認を何度も行い始発で集合する駅に行くとすでにマクダウェルがいた。もう何も

言つまい。

といつあえず移動中はルーミア、咲夜、長谷川、マクダウェル、茶々丸の班と一緒に遊ぶことにした。

「へへへ、お前の強運もここまでだ。今度こそ私の勝ちだあ！ストレートフラッシュ！」

マクダウェルがハートの9・8・7・6・5を出す。

「悪いが運命は俺に味方している」

自分の手札をマクダウェルに見せる。

「ロイヤルストレートフラッシュ……だと？」

スペードの10、J・Q・K・Aをマクダウェルの田の前に置きマクダウェルが賭けていたお菓子をルーミアに渡す。

「わはー！」

「なぜだ！なぜ勝てないんだ！」

まあ、能力使つてゐるからな。『運命を操る程度の能力』今のところゲームの勝敗くらいしか操れないけどな。もちろん札をいじつてるわけではないのでえ能力を知らない奴はいかさまをやつていると気付かない。気付くまで遊んでみよう。

「ハーペア」　ロイヤルストレートフラッシュ

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

ノーベル賞受賞作家ヨハネス・ラウス

「... ハーベア」 - 日イヤルストレー エフハッシュ

「……………ババア」——「イヤヤルヌエーテルシッ！」

「イヤリストリート」

……ちーでござるかああああああああああああ

マケタウエ川が一時に爆発した

「なんだ！？六連続ノーペアつて！！なんだよ！？七連続ロイヤルストレートフラッシュつて！！自分の運のなさを笑えばいいのか！」

「マスター落ち着いてください」

「落ち着いてられるかああああああああああああ！！！茶々丸いかさまはなかつたんだな！？本当になかつたんだな！？本当はちょっとあつ

たんじやないのか？いや、むしろお前が犯人か！…巻いてやる…巻いてやる！」

「あああ、マスターそんなに巻いてはいけません」

暴れているマクダウェルに向つとれわやじてやる。

「…ばれなければいかまじやないんだよ」

「やつぱりなんかしたのかお前わああああああああああ…」

「うふうつ…」

「ほ～おこれは朝から見事なコードスクリュージャ」

「いやー素晴らしいですよ実に」

マクダウェルが暴れている間にカエルが大量に発生したり、殴り飛ばされた時に燕を巻き込んでしまったり、どつかのgentlemanがマクダウェルのパンチに感心していたり、桜咲が目を丸くしていたり、いろいろありましたがもうすぐ京都です。

言い忘れてたけど鬼灯はお留守番です。

第一十六話／風呂

京都

目が覚めると京都にいた。新幹線の中で何かあったような気もしないわけでもないとも言い切れないがまあ大したことではないだろう。というわけで今は清水寺にいるのだが…。

「京都お————つ……」

「そーなのかー」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「そーなのかー」

「だれかっ！—飛び降りれっ！」

「では、拙者が…」

「おやめなさい……」

テンションが高い！—！質素で静かな所がいいんじゃないか。これぞ、わびさび。日本の美意識の一つつて…。

「見る、茶々丸！清水の舞台だ！飛び降りるぞ！」

「イエス、マスター」

お 前 ら も か！！！

「いいや、ほつとくのかよー?」

「つー、ほつとくのかよー?」

「久しぶりに学園の外に出れたんだこれくらこまめに見てやる!」
……………めんどくさいし」

「本音がでてるぞ」

おつと失敗失敗。

「つーか、あんたらはいつも通りだな」

だつてねえ…。

「ルーミアは寺より喰い物だし」

「咲夜は歴史に興味ないし」

「俺は立つ前から知ってるし」

「いや一人おかしい

おかしいとは失礼な。

「ネットで行叢居士と調べてみる。俺がふざけたときの話が書いて
ある」

「いやふざけたのかよー?」

まあびーでもいい話だな。

「音羽の滝にでも行くか」

音羽の滝に着くと10人ほどが酔いつぶれていた。なぜに?

「ん…なんかお酒臭くないですか?」

「あーーー新田先生これは…」

「上を見てください。悪質ないたずらのようです」

屋根の上に酒樽を見つけたので新田先生に報告する。そつちは新田先生達の任せて生徒をバスに押し込みましょひ。ぐっすり寝てるから旅館の見回りは楽になつたけど。

「風田は命の洗濯ね…。苦労が風田までついてくる場合どうすればいいのやら」

「あの、聞いてます?」

周囲の音を消す程度の能力と距離を操る程度の能力を使って自分の周りの音を消してネギとの距離を離し固定する。さて少し寝るか。

「ちょっとー?あれ?どれだけ歩いても近づけない。時取先生ー!
聞こえますかー!……ダメだ全く反応しない。桜咲さんのことで
相談したい事があつたんだけど」

「私がどうかしましたか?ネギ先生」

「実は…つて桜咲さん!…びひじじじにー?」

「どうしても何もお風田に入る以外に何をするんですか?それと教員が入る時間はもう過ぎてますよ」

もうそんな時間!?それじゃあ早く出なくちゃ。

「急がなくてもいいと思いますよ。ほんどの人が酔いつぶれてますから。それと女性の体をじろじろ見るのはどうかと思いますよ」

「うー、うーみんなでこー。」

慌てて背中を向ける。

（ねえ、カモ君どう思う？）

「（ありや間違いねえ。やっぱり関西のスパイだ。油断したといひをふす」とやるつもりだぜ）」

「全部聞こえますよ。私のことが気になるなら学園長に連絡してください。私がお嬢様の護衛であることがわかりますから」

お嬢様つて？そのことを聞けりとしたら脱衣所から悲鳴が聞こえてきた。

「お嬢様っ！？」

今の声つて木乃香さん？それじやあお嬢様つて…。

どうやらネギ先生は私を関西のスパイだと思ってたようだ。そんなことはどうでもいい、私はお嬢様をお守りできれば…。

「お嬢様！無事で……す……ね」

「あつせつひやん

「わはー」

「桜咲さん」

お嬢様をお姫様だっこしている咲夜さんにお姫様だっこされているお嬢様。式神であろう猿で遊んでいるルーミア。呆然としている神楽坂さん。切り刻まれた式神だつただろう紙切れ。アレ？咲夜さんがいれば私つて必要ない？

目を覚ますとルーミアと咲夜が隣にいた。教員の時間は過ぎてるようだが周りを見ても他には誰もいない。

「もう少し命の洗濯をさせてもらひつか……」

第一一十七話へ「翼の不死鳥へ

「 1

手札から3のカードを出す。

「これならいかさまなどできなにだろ？。2だ」

マクダウエル達の班に交じってダウトをしている。茶々丸は脳波や心拍数などで嘘がわかるので今回も審判だ。まあ、その気になれば運命操れるんだがそんな無粋なことはしない。

「 3なのだー」

「 4です」

「 5だ」

「 な……6だ」

「ダウトーはつはつは。未熟者めが！」

マクダウエルが喜々とした表情でめくるが…。

「 6……だと……？」

「そんなミスするわけないだろ？」

まさか「いつも簡単に引っ掛かるとは思わなかつた。

「近衛が攫われたようだな。7だ」

何事もなかつたかのようにカードを出すマクダウェル。気配を探る
と旅館から離れてく氣配が四つと進行方向に一つ。

「そーなのかー。8なのだー」

「大丈夫なんですか?9です」

「桜咲や神楽坂がいるから大丈夫だろ?10」

「ピンチになつたら俺が行くから大丈夫だろ。11」

「そんな計画で大丈夫か?12」

「大丈夫だ。問題ない13」

「お嬢様は言つてゐる。ここで負ける運命ではないと…。1」

「そんな余裕で大丈夫か?2」

「一番いい運命を頼む。…と、そろそろ行くか」

そつ言いスキマに飛び込む。

「フフ…… ょおここまで追つて来れましたな。そやけどそれもこここまでですえ」

猿のきぐるみを脱いだ術師が巨大な階段の上で不敵に笑う。

「させらかつ！」

桜咲が駆けあがろうとするよりも術師の後ろから現れた白髪の女性が言葉を紡ぐ方が速かつた。

「…送り火 「京都大文字焼き」」

「スペルカード！？」

「こ」の程度っ！」

慌てて下がると巨大な炎から無数の火の粉が飞んできた。

わずかな隙間を通り避けきれないものは剣で払う。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。吹け、一陣の風！刹那さん下がってください！」

ネギ先生の言葉を聞き後ろに大きく下がる。

「風花・風塵乱舞！」

ネギ先生が放つた魔法が巨大な炎を

「呼ばれず飛び出で…ぬおつー?」

時取先生と一緒に吹き飛ばした。

「つて。時取先生ー?」

「な、何や……!?

びっくりした~。おわかあんなとひかで出でるヒコア恋のべし。
まあ、それはいいとして。階段の上に立つ彼女に言葉をかける。

「久しぶりだな。妹紅」

「久しぶりつて……私たちが生きてきた時間に比べれば数年なんて一瞬だろ。纏静」

第一一十七話「羽の不死鳥」（後書き）

スペルカード説明

送り火「京都大文字焼き」

名前通り巨大な大の字の炎から無数の火の粉が飛んでくる。

第一一十八話（師弟）

「とうあえず

「近衛のことは頼むぞ」

後ろにいる桜咲が頷くのを確認する。

「妹紅。場所を変えるぞ」

「了解」

とある森の中。纏静と妹紅の二人は

「とうあえずねぎま」

「はいよ」

なぜか焼き鳥を食べていた。

「で、なぜこっちにいるんだ？」

屋台で焼き鳥を焼いている妹紅に話しかける。

「ああ、それなら私が来た後に閻魔さまから手紙が来た」

ポケットから数枚の紙を出して渡してきた。

「え、何々『私が監視していながら』のような事態になつて申し訳ありません。一度と今回のようにことがないようハ雲紫には私からきつく言つておきます。本当にハ雲紫ときたら（以下数枚ハ雲紫についての愚痴）とこんなことを言つても仕方ありませんね。今回ることは結界が揺らいだ時と同じ時に召喚されたためあなたがそちらに行つてしまつたのだと思います。先の一召と同じようにこちらに戻る術は今現在ありません。なので時取纏静を頼つてください。彼は今麻帆良にいるはずです。上白沢慧音にはこちらから事情を話しておきました。無理はしないようにとのことです。それではこのへんで。今回は本当に申し訳ありませんでした』四季映姫・ヤマザナドウより。か…」

うん。御疲れ様です。それと

「俺、幻想郷に帰つたら、雛に厄取つてもうつんだ…」

「待て、それは死亡フラグだ」

だつてねえ。こんだけ厄介事があるとねえ。

「とりあえず、修学旅行の間はそつち側なんだろ?」

「ああ、たぶんお前らの相手させられると思つけどな

気配を探り桜咲が近衛を助けたのを確認する。

「そろそろ戻るか

「それじゃあ私も戻るよ」

屋台をスキマに戻し妹紅と向き合ひ。

「次に来る時は本気で来い。鈍つてないか見てやるよ

「わかつたよ。師匠」

旅館に戻るとマクダウェル達がいまだにダウトを続けていた。とり
あえず妹紅の焼いた焼き鳥を渡し今日はお開きになつた。

第一十九話／鹿

『いただきまーす！……』

朝からテンション高いね』いつらは、それと…

「おつかわり、おつかわり、うつれしいな～」

ほどほどにしてよルーミア。

ルーミアが六回田のおかわりを食べ終えたころに朝食の時間が終わ
った。

「ネギくんッ！今日ウチの班と見学しよーーッ！」

「ちょっと、まき絵さんッ！ネギ先生はウチの3班と見学をッ！」

「あ、何よーーッ！私が先に誘ったのにーーッ！」

「ずるーーッ！だつたら僕の班もーーッ！」

ネギ君大人気。まあ、俺はルーミア達と回るから関係ないけど。新田先生にも許可を取つていてるから修学旅行中は基本的にルーミア達と回ることになる。基本的にネギ君の仕事には口を出さない。昨日はノリで介入したが。とりあえずバスに向かうか。べツ、別に悔し

いわけじやないだ。

鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿
鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿鹿

ど う し て こ う な つ た ! ?

少し振り返つてみよ。

奈良公園にて

「あの鹿は食べてもいい鹿?」

「駄目だ。シカせんべいでも食べてなさい」

「わかつたのだ～」

ルーニア、シカせんべいを鹿たちから強奪。

「纏静～助けて～（泣）」

で、今に至ると。助けてやるか。密と疎を操る程度の能力で鹿の密度を減らす。そして長谷川がルーニアを呼ぶ。

「せりやわとりひかり来い」

「千鶴～（泣）」

「つたぐ、べとべとじやねえか。せりじつとしつる」

「ありがと～千鶴～」

まつたくこんな奴が人喰い妖怪なんてな。今だに信じられねえぜ。

「お前なら鹿ぐら追っ払えただろうが」

「だつて、纏静が食べちゃだめつて」

「なぜその話が出てへるー?」

記正やつぱは妖怪だこつ。

「酷い目にあつた」

「バカかお前はあるの程度で取り乱しあつて」

「じゃあお前も味わってみるか?」

時を止めマクダウエルが持つていたシカせんべいを頭の上に載せさつきルーミアがいた場所に立たせ鹿を萃める。

「ああ、マスターがあんな楽しそうに……」

「大丈夫なのか～？」

「…ああ、さつきはすまなかつたな」

とりあえず移動するか。

「あてどりに行くかな。おひ。あんなどうに屋台が。

「あそこの腹（はら）いらっしゃるか」

「わはー」

「てかなんでこんなとこに屋台があるんだ！？」

「妹紅、ツケで頼む」「ツケで～」「ツケでお願いします」

「　　いや、第一声がそれかよ」　　」

第三十話／竹取物語

健康マニアの焼き鳥屋にて

「妹紅、ツケで頼む」「ツケで」「ツケでお願いします」

「いや、第一声がそれかよ」「」

幻想郷出身の三人の言葉に不老不死、吸血鬼、魔法使い見習いがつっこむ。つっこみながら一人は焼き鳥を焼き一人は席に着く。

「つーか先生昨日敵になつたって言つてなかつたか?」

焼き鳥を食べながら長谷川が聞いてくる。

「こんな昼間から戦うわけないだろ。それにここにいることでお互いに仕事してるんだよ。俺達は予定外の戦力である妹紅が向こうに行かないように牽制してるし、妹紅も強敵である俺達を牽制してるとこだつて大義名分のもとでサボってるんだよ」

「最後の一言で台無しだぞ」

「まあいいじゃないか、その通りなんだから。そっちの三人は初めてだよな? 健康マニアの焼鳥屋の藤原妹紅だ。まあ、よろしくな」

「魔法使い見習いの長谷川千雨だ。よろしく

「真祖の吸血鬼のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。こつちは私の従者の」

「ガイノイドの絡繰茶々丸です。よろしくお願ひします」

「魔法使いに吸血鬼に…………がいのいぢつて何だ?」

「河童以上の科学力で作られた体を持つ式神だ」

「ああ、なるほど」

「「その説明でわかるのか!?!?」」

何を驚いてるんだ?これ以上ないほどわかりやすい説明だろ?

「…まあいい。で?お前はなんて言う妖怪なんだ?それほどの力を持っているんださぞかし有名な妖怪なんだろう?」

マクダウェルの言葉にきょとんとする俺と妹紅。

「いや妹紅は人間だぞ」

「まあ妖術は一応使えるが種族で言えば人間だよ、私は。まあ普通の人間ではないけどね。……少しばかり昔話をしようか?」

そう言い自嘲気味に笑い話しへ始める妹紅。

今から千三百年くらい前かな？私が住んでいた都にある噂が流れ始めたんだ。さぬきのみやつひ讃岐造の屋敷にこの世のものとは思えない程の美しさを持つ姫がいると。その名前は

かぐや姫

それからといふもの世間の男という男がかぐや姫に結婚を申し込んだ。もちろん私の父様もだ。もちろんそんなに簡単に結婚できるはずもなくほとんどの者が一日会つともなく諦めた。父様もこの時諦めてくれればよかつたんだけどな。残った五人にかぐや姫は五つの難題を出した。

「仏の御石の鉢」「蓬莱の玉の枝」「火鼠の裘」「龍の首の珠」「燕の産んだ子安貝」

父様が言われたものは「蓬莱の玉の枝」だった。

「蓬莱の玉の枝か…。車持皇子…いや藤原不比等か？」

知つてゐるのか…。なら少し短くするか。誰一人難題を解くことができずかぐや姫は月に帰ることになった。多くの人がかぐや姫を守ろうとしたが月人の見たこともない攻撃で全ての者が地に伏した。私の父様も…。かぐや姫がいなくなつた後私は家族の人生を狂わせたかぐや姫に復讐することを決めた。…いやそんなんじゃないな。子供の嫌がらせだ。

私はかぐや姫が大切な人のために残した壺を奪おうと決めた。岩笠という名前の男はその壺を持ちこの国で最も高い山に数名の兵士を連れて登る後をつけた。子供の体力で大人について行けるわけもなく八合あたりで私は力尽きた。私が付けてきたことなんてとっくにわかつていた岩笠たちは私を励ましながら一緒に山頂に登った。

勅命により岩笠が壺を火口へ投げようとする時そいつは現れた。

木花咲耶姫

咲耶姫は壺を投げようとしていた岩笠を止め言った。その壺を燃やしてはいけないと。その中には不老不死の薬があると。その言葉を聞き壺の中身を知っていた岩笠以外の者たちは動搖した。その夜は異様な空気に包まれたよ。まあ山を登つた疲れで私は眠つてしまつたんだけどね。

次の日、私と岩笠は咲耶姫に起こされて言われた他の者たちは薬を奪い合つて死んでしまつた。私達は血の海に沈んだ焼け爛れた死体を見ながらその言葉を聞いていた。そしてその薬は妹がいるハケ岳に捨てるように言った。

酷く暗い雰囲気の中会話もなく下山をしていた私はここに来た目的を思い出し岩笠が背負う壺を見て魔が差してしまつた。

気が付けば私は急な下り坂で命の恩人の岩笠の背中を蹴り飛ばしてたよ。そして壺を奪つて逃げた。

あの時の私はどうに逃げようとしてたんだろうね。もう帰る場所も
なかつたのに…。

第三十一話 千年越しの賭け

蓬莱の薬を飲み不死になつてから三百年。隠れて生きるのに疲れた私は妖怪を片つ端から退治していき自己を保っていた。そんな生活をしていた私はその日立ち寄った村である噂を聞いた。東の山には人の皮をかぶつた妖怪が住んでいると。明日にでも山に行こうとしていた私はある村人の言葉を聞き夜の山に入つて行つた。

曰く、不死である。

三百年の間に覚えた妖術で火をともしながら山の中を歩く。しばらく獣道を歩くと開けた場所に出た。そこにあつたのは空を隠すほど大きな樹とその横にある小さな小屋だけだった。私は少しの期待と共に戸を開けた。そこにいたのは……。

「まあ、そこから糺余曲折あつて今に至るわけだよ

「だいぶはしょったな！？」

「むしろそこからが大事だろーー。さつさと吐けーー」

「文句いつてないでさつさと戻るぞ。もうすぐ集合時間だ」

そつ言い纏静が吸血鬼を引きずつて行く。私はルーミアに持ち帰り用の焼き鳥を持たせたまままで纏静たちが座つてた椅子に座る。

「またね～もう一～」

ルーミアに手を振り返し自分用に取つて置いた焼き鳥を食べる。

「あれから千年か…」

目を瞑り千年前を思い出す。

「あら？人間のお客さんなんて珍しい。何か御用？」

一番最初に思ったのは…

「まいいわ。丁度夕御飯の支度が終わつたからあなたも食べるでしょ？」

人の話を聞かない奴だな…。

「で、何の用でしたっけ？」

夕飯を食べ終わり後戸づけを終えたところで初めてそう聞いてきた。

「死なない奴がここにいるって聞いてな」

「ふうん。で、実際に見た感想は？」

「どうからどう見ても

「ふつつの人間だな」

「残念ね。私は妖怪しでの鳥よ」

「へえ。なら丁度よかつた」

「ん、何が？」

手に炎を纏わせ殴り掛かりながら叫びつ。

「私は妖怪退治屋なんだよ」

「喧嘩する相手はよく見なさい」

その声を聞いた瞬間私は何かに吹き飛ばされ気付いたら星空を見上げていた。

「痛つ！？」

痛む右腕を見るといつつか鬼にやられた時のようにぐちゅぐちゅにな

つていた。でも私には関係ない。不用意に近づいて来た女に右の貫手を放つ。女は避けようとするが脇腹を抉る。

「そ、う。そういうことなの」

女が私の右腕を見ながら言ひ。

「あなたも死ねないのね」

「ああ、そうだよ。私は蓬萊の薬を飲んだ蓬萊人だ」

時間が戻るよに再生する女の脇腹を見ながら言ひ。

「で、これからどうするの？永遠にここで私と殺し合いつもり？」

「それは……死んでから考えるよ……」

そこからは一方的だった。私の攻撃は届かず、あいつの言葉が私の胸に何度も突き刺さる。

「もうやつてすべて撥ね退けても辛いのは自分よ？」

「うむうむ……」

そんなことはわかってる。

「あなたを受け入れてくれた人もいたでしょう？」

גָּדוֹלָה וְסִימָנָה

そいつらも私を置いて逝つた。

「んな」とを續けても誰も許してくれないわよ?」

卷之二十一

許しながらいい私が必要るのは罰だ。

馬鹿ね

目の前が真っ暗になつた。

「……………」

知らない天井。ここはあいつの家？

「目が覚めた？」

「どうじゅつもり？」

「どうじゅつもりは勝者に従つものよ」

「私に何をさせむつもりよ？」

「理想郷を作るのを手伝つて欲しいの」

「理想郷？」

「人も妖怪も半妖も神も蓬萊人も全てを受け入れるそんな場所」

「ハツ！馬鹿馬鹿しい。出来るわけないだろ？」

「そんなに言うなら賭けをしましょう。千年。千年たつた後も私が
言つ理想郷ができると思ったならあなたの願いを一つ叶えてあげ
る」

「なら…」

「賭けはお前の勝ちだよ。纏花。私はまだ生きていきたい」

『なり……私を殺してくれるかい？』

『千年たつてもそんなこと言つたら殺してあげるわよ』

人里の人達が黒い服を纏つてある家に集まっている。皆悲しみにく
れ涙を流す中一人だけ涙を見せず黒い枠の中にいる女性の笑顔を見
つめている。赤と白の服を着ていた彼女は女性の笑顔に何か呟くと
その家を後にした。

博麗神社

「あつ。妹紅さん。どうしたんですか？」

長い階段を上りきると境内を掃除している巫女に話しかけられた。
何代か前のあいつの印象が強すぎて巫女の名前は未だに覚えられな
い。

「ああ、博麗の巫女か。纏静はいるかい？」

「時鳥様なら無縁塚に行きましたけど…」

「無縁塚？あんなところになんかあつたか？」

「とりあえず行ってみるよ。修業がんばりなよ

「はいー。」

元気に返事をする巫女に手を振り階段を下りていく。

「あいつも」のくらい素直だつたならよかつたのにな

元気に返事をするあいつを想像する。そつと言えば…

「賽銭入れた時は素直だつたな」

無縁塚

魔法の森を抜け再思の道を歩き紫の桜が舞い散る中纏静は大きめの石が立ててある場所に手を合わせていた。

「外来人か…」

無縁塚にあるほとんどの墓が幻想郷とは縁のない外から来た人の墓である。人知れず迷い込み人知れず消えて逝く。しばらくその様子を見ていると纏静が振り返り話しかけてきた。

「どうしたんだこんなところで？」

「ああ、ちょっと纏静に殺してもうおつと思つてね」

「さつさつと纏静は困つたように笑い咳いた。

「まさか慧音の言つた通りになるとはな」

「慧音が？」

詰め寄る私の頭を纏静は少し落ち着けと一、二度軽く叩いた。

「人妖継想神たる我が預かつた上白沢慧音の言葉だ。心して聞け」

似合つてないぞと呴きながら姿勢を正し纏静の言葉を待つ。

「『』の言葉を聞いているということはお前は纏静に「殺してくれ」なんて無茶なことを言つたんだろう。私にはわからないとでも思つたか？残念ながらお前のことは私が一番知つているんだ。これくらいわかるさ。そんなお前に言いたい事がある。死なないでくれ』」

慧音にそなこと言われたら私は……私は……。

「『』と言いたいが、私は妹紅に苦しんでまで永遠に生きていて欲しくはないだから』」

「『人としてしつかり生きて、やりたい事を全部やって、たくさん笑って、しつかり死んでから私のとこに来い。待ってるぞ』」

「け……いね……」

「泣くなよ。たくさん笑えって言つてただろ？が」

「泣いて……ない。……慧音の言葉で心が溢れてるだけだ」

そう言うと纏静に引き寄せられ抱きしめられた。まったく、一人の想いはちっぽけな私の心には大きすぎるよ。だから……

「

少しくらいここで眠つてる奴らに分けてもいいよな……。

「妹紅。お前の永遠。俺が受け継いだ

纏静が何か言ってたが私の声にかき消されてよく聞こえなかつた。

「久しぶり。慧音

「久しぶりだな。妹紅」

死を知らなかつた少女が死を知り友と再会する。そんなあるかもしない未来。

第三十一話／頭突き

「くわびる争奪！修学旅行でネギ先生＆時取先生ラヴラヴキッス大作戦！！！ルールは今夜中にネギ君か時取先生に熱いキスをするだけ！武器は枕のみ、それ以外は何も言わない！新田に見つかっても全員他言無用だよ！」

茶番が始まった。

「というわけで匿ってくれ」

「参加すればいいじゃないか。小娘とキスし放題だぞ？」

マクダウェルがそう言つてくるが

「めんどくさい。」うちの魔法は嫌いだ。俺と口づけなんて百年早い。めんどくさい」

「めんどくさいって一回言つたぞ」

「大事なことだからな」

ああ、めんどくさい。めんどくさい。

「見つけたアル！」

「二二二二」

扉を開け格闘バカと忍者バカが入つて來た。ほんとにめんどくさい。

「お前達には三つの選択肢がある。俺に殴られてからロビーで正座するか、俺に蹴られてからロビーで正座するか、俺に頭突きされてからロビーで正座するか。さてどれがいい？」

「どれもいやアル！先生に勝つて唇をもらうアルよ！」

ガシイツ！！

「は、早いある!?」

「慧音直伝」

バカの顔を目の前に持ってきて思いつきり…

ズゴンッ！！！

「ひざい！？」

口から白いものを出してるバカを後ろに放り投げ次の目標に目を向ける。

「覺悟はいいか？」

「拙者は古みたいに頭は固くないから遠慮するで」いやむ。御免!」

ガシイツ！！

「安心しない。死にはしない。むしろ頭が良くなる」とはない」ともない」と極一部で噂されてない」ともないと思つたような気がする」

「不安しかなこで」
「じゃれりへーへー」

「その通りだ」

「はひいーー?」

物言わぬ一人をロビーに引率すつて行く。

「凄まじい威力だなあの頭突きは

「け・ねの頭突きはもっと凄いよ?」

「あれ以上にか!?」

「うん。皆小町にあつて来たつてこいつも並つてる」

「小町?」

「三途の水先案内人です」

「三途って…臨死体験かよ！？」

ロビーに行くとほとんどの生徒とネギ君が正座していた。主催者である一人と一匹に物言わぬ一人を置きながらいい笑顔で笑いかけてやつたら真っ青になりがたがたと震えていた。とりあえず明日にでも頭突きを喰らわしてやろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197t/>

幻想郷から来た時鳥

2011年11月5日19時32分発行